

国立国語研究所学術情報リポジトリ

基礎篇第三十課 せんせいを おたずねします：
待遇表現 2

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002805

基礎篇第三十課

せんせいを おたずねします

——待遇表現 2——

国立国語研究所

前 書 き

国立国語研究所では、昭和49年度以来、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課およそ5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするもので、全30課を昭和58年度までに完成した。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにすることを願っている。

この第三十課「せんせいを おたずねします」の解説は、日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室が企画・編集し、執筆にあたったものは、次のとおりである。

本文執筆 窪田富男（企画協議会委員・東京外国語大学教授）

資料1., 2. 日向茂男, 清田潤（日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室）

昭和60年3月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

目 次

1. はじめに.....	1
2. この映画の目的・内容・構成.....	2
2.1. 目的・留意点.....	2
2.2. 内容・構成——場面を中心として.....	4
2.2.1. 言語場面, 言語表現についての扱い.....	4
2.2.2. 言語場面, 言語表現についての分類.....	4
(1) 人間関係.....	4
(2) 場面の構成.....	6
(3) 本書における敬語の分類.....	8
2.2.3. 言語場面, 言語表現についての解説.....	10
3. この映画の学習項目の整理.....	47
3.1. 日本人の敬語行動.....	47
3.1.1. 人間関係の「分類」.....	48
3.1.2. ウチ・ソトの人間関係.....	49
3.1.3. 上・下の人間関係.....	53
3.1.4. ウチ・ソトと上・下のからみ合い.....	54
3.2. その他の学習項目.....	56
3.2.1. 「～が」による後続文への導入.....	56
3.2.2. 文の中止用法.....	57
4. 参考文献.....	59
資料1. 使用語彙一覧.....	65
資料2. シナリオ全文.....	88

1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初歩の日本語学習期における視聴覚教材として企画・制作されたもので、この映画「せんせいを おたずねします」は、その第三十課にあたるものである。

この映画の企画、概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の作成等に当たったものは、次のとおりである。

昭和58年度日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

石田 敏子	国際基督教大学講師
木村 宗男	日本語教育学会専務理事
工藤 浩	国立国語研究所言語体系研究部研究員
窪田 富男	東京外国語大学教授
斎藤 修一	慶応義塾大学国際センター教授
佐久間勝彦	東京外国語大学講師
杉戸 清樹	国立国語研究所言語行動研究部研究員

国立国語研究所日本語教育センター関係者（肩書きは当時のもの）

南 不二男	日本語教育センター長
川瀬 生郎	日本語教育センター日本語教育指導普及部長
日向 茂男	日本語教育教材開発室長
清田 潤	技官
中道真木男	研究員

この映画「せんせいを おたずねします」は、日向茂男、清田潤の原案に協議委員会で検討を加え、概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は、日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化、つまり脚本の執筆には同社の前田直明氏があたり、また同氏はこの映画の演出も担当

した。ただし演出の際の言語上の問題については、協議会委員及び日本語教育センター関係者の意見が加えられている。

本解説書は、日本語教育教材開発室が全体企画・編集を行い、執筆には窪田富男委員があたった。また資料1.，資料2. は、日向茂男、清田潤が担当した。全体の企画，また執筆にあたっては，この映画の企画・制作段階での意図が十分生きるよう努めた。

現在，この映画は，より多くの人の利用の便をはかって下記の九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理係
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお，この映画は，そのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

2. この映画の目的・内容・構成

2.1. 目的・留意点

この映画「せんせいを おたずねします—待遇表現2—」は，「よく いらっしやいました—待遇表現1—」に直接，続くものであり，いわば前篇に対する後篇である。言語表現としては，前の29巻では尊敬語形式が多かったのに対し，この30巻では謙譲語形式が多く取り入れられている。

29巻と同じく、この巻でも対人関係におけることばの使い方を意識的に学習させることを目的としている。したがって、29巻の解説で述べた考え方・扱い方・留意点の基本は、当然のことながら、この30巻でも引き継がれる。

29巻が家族関係（実の親子・義理の親子・夫婦）を中心とし、師弟関係や客・店員関係が付加されて、ことばの使い方が展開されていたのに対し、この30巻では、師弟関係（ないし職業上の先輩・後輩関係）を中心として、謙譲語が多用される。29巻の家族関係から社会生活上の人間関係に拡大され、ことばは尊敬語中心から謙譲語中心に移ったと考えてよい。したがって、29巻におけるよりも＜気づかい＞を要する人間関係や、＜敬語が多用される＞場面が取り上げられている。つまり、表現の敬意度も高いものとなっている。

敬語形式についていえば、後述のように、語彙的には多種になっているが、構文的には複雑ではなく、29巻の分類に当てはめて考えることができるから、語の意味さえ分かれば文意の理解が困難だとは思われない。それよりも、学習者を惑わすとすれば、対人関係や場面に応ずる敬語の＜選択＞の妥当性や、それに伴う日本人の＜態度・しぐさ＞（非言語行動）の問題であろう。すでに29巻においても指摘したが、例えば、義理の親子間や客・店員間のことば遣いが母語文化に照らして理解困難の場合があるように、この30巻でも、例えば訪問の場面で、夫の後輩に当たる若い訪問者に対する妻のことば遣いや接待の態度にも疑問を感じる学習者も少なくないと思われる。この映画に採用されていることば遣いや態度が日本での一般的なものであるかどうかについては議論が分かれるかもしれないが、それも教育を目的にした場合の、＜程度＞についての判断の違いであって、少なくとも＜基本的に日本的なるもの＞からはずれていると判断する者はないであろう。待遇表現としての敬語の理解は、この日本的なるもの——日本人の行動様式——の理解と表裏一体の関係にあることもまた言うまでもないことである。学習者にとって、日本や日本人の発見につながれば、この映画は幸いであつた、ということになろう。

また、この映画は29巻同様、初級・中級段階の学習者だけでなく、上級あるいはそれ以上の学習者にも十分使える内容——意図したものではないが、

言語表現・非言語表現ともに——を持っているので、学習段階に応じたいろ
いろな利用が望まれる。

なお、ストーリーの背景は29巻が京都であったのに対し、30巻では奈良に
移る。

2.2. 内容・構成——場面を中心として

2.2.1. 言語場面、言語表現についての扱い

この映画での場面や言語表現については、以下のとおり扱うことにする。

1. 映画の構成にしたがって場面を分ける時には、Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ……のよう
にし、それをさらに短いシーンに分ける時には、Ⅰ—1，Ⅰ—2，Ⅰ—
3……のようにする。
2. 言語表現については、文単位で①，②，③……のように通し番号をつ
ける。類似文や変形文を引用する時には、①'，②'，③'……のようにす
る。変形引用が三つ以上ある時には，"，"'……の順で'を重ねていく。
3. この映画の中に現れていない文や語句を例示する時には，[] 付き
の番号をつけ，それに関連した引用文や引用語句には，2.の場合と同様
に'印をつける。一群の文や語句を例示する時にも，出現順に通し番号
をつける。

本解説書での言語表現の扱いについては，文単位の認定に多少問題のある
ところもみられるが，ここでは，積極的には，その問題に触れない。

なお，①，②，③……の文番号は，使用語彙一覧で引用される文や，シナ
リオ全文につけられた番号と共通である。

2.2.2. 言語場面、言語表現についての分類

29巻の解説の方式・順序にならって，この映画で採用されている人間関
係・言語場面・敬語について述べる。

(1) 人間関係

対話のある人間関係は次のようなものである。小川清を中心として展開す

る。

師弟関係：(A)林先生と清（29巻で登場。林先生は大学の教授で清は講師。

林先生が教授であるという言語上の証拠はない）

(B)林先生と木村先生と清（林先生と老年の木村先生は旧知の間

柄——かつての師弟関係ないし同僚を想像させる——であり、

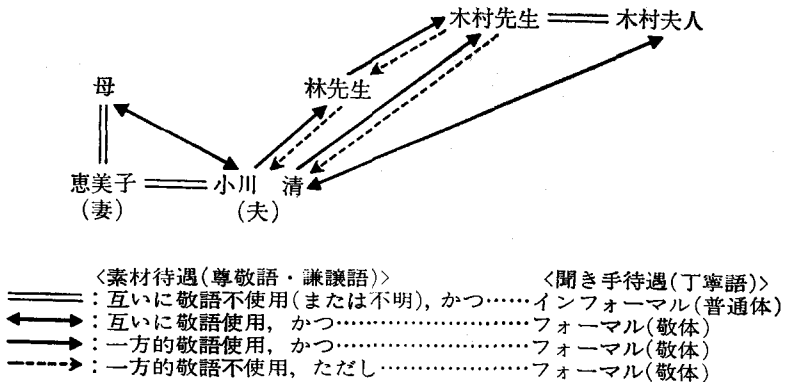
清と木村先生とは林先生の紹介で初対面。木村先生は初登場）

主人と訪門客の関係：木村先生とその夫人と清（清が木村先生のお宅を訪

問し、まず夫人に迎えらる。夫人も初登場）

家族関係：清と恵美子と恵美子の母（29巻と同じ）

これらの人間関係とことばによる待遇との関係を図示すれば次のようになる（29巻の図も参照されたい）。



この図からおよそのことが分かる通り、狭義の敬語（尊敬語・謙讓語・丁寧語）が使われていないのは家族関係（清と母の場合を除く）の場合だけである。木村先生から夫人へは敬語は使われていないが、夫人から先生へは「はい」の一言だけなので判断ができない。また、木村先生から林先生へのことばも「そうですね、来月の中頃に」だけであるので丁寧語を使用している（フォーマル表現）こと以外には判断ができない。

また、この図では表わされていないが、眼前にいない第三者を話題の人として扱うセリフもわずかだが採用されている。次の3種である。

- 1) 林先生と清との間で木村先生のことを話題にする——2人とも尊敬語使用 (④, ⑤, ⑩)
- 2) 清と恵美子の間で木村先生のことを話題にする——2人とも尊敬語使用 (⑤⑩, ⑤②, ⑤③)
- 3) 清と木村夫人との間で木村先生のことを話題にする——清は尊敬語使用, 夫人は不明 (⑥③, ⑦①)

眼前にいない話題の人をどう扱うかは、それぞれのセリフの解説の項で述べる。

上記の人間関係とことばの使い方との関連の理解には、29巻の場合と同様、上・下、ウチ・ソトその他の概念の導入が必要である。

(2) 場面の構成

この映画の言語場面の内容・構成は、およそ次のようである。清の行動が中心となる。

場面Ⅰ 大学近くの道で (①～⑬)

- 登場人物の紹介 (朝のあいさつ)
- 別の登場人物にふれる
- 紹介をお願いする、その理由

場面Ⅱ 自分 (清) の研究室で (⑭～⑰)

- 電話で呼ばれる

場面Ⅲ 林先生の研究室で (⑱～㉔)

- 部屋のドアをノックする
- 人の部屋に入ったときのことば
- 初対面のあいさつ
- 用件を述べる
- 訪問をめぐってのやりとり

場面Ⅳ 大和の田園で (㉕～㉗)

- 塔の見える池のほとり

場面Ⅴ 唐招提寺で (48～54)

- 唐招提寺の屋根

場面Ⅵ 別れ道で (55～60)

- 唐招提寺の近く

場面Ⅶ 池にそった道を歩いて (セリフなし)

- 猿沢の池

場面Ⅷ 大仏を前にして (セリフなし)

- 東大寺, 大仏

場面Ⅸ 木村先生のお宅で (61～94)

- 訪問とあいさつ
- 応接間での応対
- 過日のことにふれ, 礼を言う
- 遠慮する言い方
- もてなしの言い方
- お茶をすすめる
- 誘う言い方, それを受ける言い方
- 外出の言い方
- 辞去のあいさつ, それに対する言い方

場面Ⅹ 平城宮跡で (セリフなし)

- 遺跡内を歩く

上記Ⅰ～Ⅹの場面は, セリフのない場面 (Ⅶ, Ⅷ, Ⅹ) を除いて, 言語表現との関連でさらに2つから6つの小場面に分割することができる。それは, それぞれの解説で扱うことにする。

上記(1)の人間関係と(2)の場面に基づいて, 学習対象となる言語場面を大きくまとめれば次のようになる。

- 1) 研究室での会談 (師弟関係) —— 人の紹介, 初対面のあいさつ, 仕事

の内容、訪問のとりきめ

2) 路上での会話(家族関係)——見物をめぐって、人の仕事の説明、別れのあいさつ

3) 人の家を訪問しての会話(主人と客の関係)——玄関口の呼びかけ、初対面のあいさつ、応接間での接待のあいさつ、辞去のあいさつ

背景となる奈良の風物については、小場面の中で最小限の解説を加えるが、興味に応じて、くわしく扱うのも、簡単にすませるのもよいだろう。

(3) 本書における敬語の分類

この解説書における敬語の分類も、29巻の分類を踏襲して、下記の4分類とする。29巻のくりかえしになるが、次の通りである。

①尊敬語(主体敬語):話し手や話し手側以外の人(主体)の動作・状態・所有などについて、話し手がその人を高く待遇する語

②謙譲語(客体敬語):話し手自身、および話し手側と認める人の行為についての表現をとおして、その行為の及ぶ先(客体)を高く待遇する語

③美化語(丁寧語):話しの中に出てくる物事を表現する場合、主として聞き手への配慮から、話し手が自分のことば遣いの品位を保とうとする語

④丁寧語(聞き手敬語):話し手がかみたら聞き手に対して丁寧意識を示す語

この映画に採用されている用例を各分類に当てはめれば、次のようになる。

①尊敬語(主体敬語):先生 ②③③(木村先生④⑤⑩⑬②②⑤⑤②, 林先生①); ~君(小川君②⑤②②, 小川清君②②); お~さん(お母さん④③); お~になる(おいでになりますよ/か④⑬③③, おいでになっています⑬); ご~になる(ご覧になりますか④③); お+名詞(お気をつけて⑤⑤); お+形容詞(おくわしい⑤⑤); ご+名詞(ご意見⑩③③, ご都合③③, ご研究⑤②); ご+副詞(ごゆっくり⑦⑦); ~くださる(来てください⑫); お~

くださる(おあがりください⁶⁵, おかけください⁶⁸⁷³); なさる (なさっているの⁶²); 方〔接尾辞〕(おくわしい方⁵⁹); ~させてくださる (ごいっしょさせてください⁶⁴)

②謙譲語(客体敬語): ご~いただく(ご紹介いただけませんか⁷); ご~いたす(ご紹介いたします²²); お~する(おたずねします⁵⁰, お待ちしておりました⁶⁴); お~いたす(お願いいたします²⁵, おうかがいたします⁴², おかまいいたしませんで⁹²); うかがう(うかがいます¹⁹, うかがいたいことがあるんですが¹⁰⁴⁰); まいる(まいります¹⁷); ~てまいる(呼んでまいります⁷⁰); 申す(小川と申します²⁴⁶³); ~ておる(研究しております²⁸, 調べております²⁸, お待ちしておりました⁶⁴); 拝見する(拝見いたします⁹¹); ~させていただく(拝見させていただきませんか⁵⁵); 他人に言う場合の自分(側)の親族名(母⁴⁴)

③美化語(丁重語): よろしい(よろしかったら⁷⁴⁰, よろしいときに²⁹, よろしいんですか⁶³); こちら²³; どうぞ²⁰⁵⁵⁶⁵⁶⁷⁶⁸⁷³⁷⁴⁷⁶⁷⁷⁷⁸

④丁寧語(聞き手敬語): ~です/でしょう; ~ます/ましょう; ~ございます/ごさいません

29巻でも述べたが、上記のような<語>単位の分類は整理上の便宜のためであって、敬意表現の理解には<文>の形で与えられねばならない。例えば⁶⁴の「ごいっしょ」だけであったら、これが尊敬語か謙譲語か一方に決めるのは意味がないばかりか有害でさえある。「ごいっしょなさいますか」(尊), 「ごいっしょしましょうか」(謙), 「ごいっしょさせてください」(尊), 「ごいっしょさせていただきませんか」(謙)など他の要素といっしょになって初めて意味上・機能上の分類ができる。また、例えば買物で客が「〇〇を見せてください」と言うときの「~ください」と、それに答えて店の人が「どうぞご覧ください」というときの「~ください」とが単に同じだと言うわけにはいかない。こうした形と機能の問題は、敬意表現に限らず、表現一般について注意が必要である。「~でしょう/~ましょう」が、狭義の推量だけ

でないのと同じである。

なお、上記の分類に入れようと思えば入れられるものであるが、次のような表現は固定的なあいさつ語や慣用句として扱うほうが有効であろう。

おはようございます①、ごちそうさまでした④⑨、ごめんください（ませ）（訪問・辞去）⑪④⑨、おそれいります⑦⑤、おかまいなく⑦⑥、失礼します／いたします②①⑤⑥⑧⑨⑨、何もございませんが⑦

むろん、慣用句といっても、ダの体、デス・マスの体などの変異があり、絶対的な定型句といえるようなものはむしろ少ない。敬意の幅（無限）のすべてに敬意表現（有限）が1対1で対応しているわけではないから、学習者はその場の表現の選択に当たって自信の持てないことが多い。

なお、敬意表現の使用が自然であるか否かは、日本語の運用力全体の問題——イントネーションを含めたことばの使い分け——であり、その運用力が不十分のうちにやたらに丁寧な表現を覚えさせることは、とってつけたようなぎこちなさを犯させる危険があることも留意すべきことである。

この映画ではまた、29巻に引きつづいて、次のような言い方も、大切な指導項目である。

- ・ 導入・前置きとしての「～が」（～たいことがあるんですが⑩⑧③、～と申しますが⑧⑩、何もございませんが⑦⑦）
- ・ 文を中止する言い方（上記⑩⑧⑩の他に、私に分かることでしたら……⑧①、ご都合のよろしいときに……⑧⑨、何もおかまいいたしませんで……⑧②）

これらについては、それぞれのセリフに即して解説する。また、学習項目の整理の3.2.で触れる。

2.2.3. 言語場面、言語表現についての解説

以下、小場面に区切って解説する。ただし、29巻で既出したものについては省略することもある。

I 大学近くの道で (①～⑬)

29巻を見た学習者にはすぐ分かることであるが、映画の初めからなじみの顔が現われる。林先生と小川清である。29巻が家族を中心としてストーリーが展開していたのに対し、この30巻では清の行動がその職業——研究者——に関連して展開する。家族内のやりとりから対社会人関係（対他人）に重点が移っているといえる。といっても、すでに29巻の清の行動の一部はこの30巻が展開される伏線となっていたことが見てとれるだろう。やがて、あらたに登場する人物は木村先生夫妻の2人だけである。

I-1 朝のあいさつ (①～②)

テーマ・タイトルが消えると、青葉の茂る石垣に沿った道を林先生が歩いてくる。と同時に清が背後から声をかける。

清「①林先生、おはようございます。」

林「②ああ、小川君、おはよう。」

①の清の「おはようございます」と②の林の「おはよう」との差異については解説の要がないかもしれないが、学習者は日本語学習のいずれかの段階で、次のような疑問を持つことが多い。すなわち、日本語のあいさつ表現もまた文体の変化があることは習ったが、このあいさつ語にはデスの体はないのか、「おはやいです」のような言い方は、それ自体として存在しているが、朝のあいさつ語になりうるかの否か、一方、「こんにちは」「こんばんは」には、なぜ「です」や「でございます」の形がないのか、と。興味のある学習者には語源的な説明をするのもいいだろう。形容詞の「デス体」については、一般論として、歴史的にも比較的新しい言い方であり、熟さない感じを与えることがままあること、まして「あいさつ語」として用いられる形容詞は「ございます体」がふつうであり、「です体」は欠けていること、形容詞の「デス体」形（「～のです」とは別）は単に叙述の丁寧な伝達であること、などを説明してもいいだろう。しかし、学習者にとっての本当のむずか

しさは、「おはようございます」と「おはよう」とが、＜どんな人間関係＞＜どんな場面＞で使い分けられるのかということである。日本人は＜同一の相手＞に対しても、上下、親疎などが明瞭な場合以外は、一方の形だけを使うとは限らないからである。

②の「ああ」や「～君」については29巻参照。何かに気がついたときの「ああ」は、文脈によるが、「あ」や「あっ」よりも、やわらかい表現、おどろきの程度が弱い表現、予測されていた事態についての表現とっていいだろう。

I-2 木村先生をめぐって(1) (③～⑥)

あいさつ「ああ、小川君、おはよう」のあと、わずかな休止で、次の会話が展開する。

林「③あっ、そうだ。

④今日の午後、木村先生がおいでになりますよ。」

清「⑤奈良の木村先生ですね。」

林「⑥ええ。」

③の「あっ、そうだ」はとつぜん何かを思い出したときのひとり言に近い表現。ひとり言はデス・マスの体にならないのがふつうである。

④の「おいでになる」は、ここでは「来る」の意の尊敬語。「行く」「いる」の意も共有するので「いらっしゃる」と同意。「おいでになる」は「お～になる」の形式ではあるが、「いで」の部分は古語「いづ」の連用形であるから現代語の辞書には出ていない。「おいで」の形で出ている。したがって「おいでになる」は連用形の部分を取り出すよりも全体を尊敬語形式として扱うのがいいだろう。「おいで」という言い切りの形は上位者には使えない。「木村先生」は話題の人物としてここで初登場。どんな人物かはまだ不明であるが、林先生が「おいでになる」という尊敬語で木村先生を待遇していることに注意させる。話題の人に対する言語待遇は、話し手と聞き手と話題

の人との3者の関係においてなされるもので、上下関係だけでは割りきれないのが現代の待遇の実相である。現在は、一般には、眼前にいない人への待遇は眼前の聞き手への配慮に引きずられる傾向がかなり強いと言われている。なお、「おいでなさる」という形もあるが、現在ではそれほど使われない。

⑤「奈良の木村先生ですね」は、話し手(清)の知識に基づく念押し・確認(「ね」による)である。「奈良の木村先生」の「の」は「奈良」と「木村先生」との関係でいく通りにも解釈できる。「奈良に住んでいる」、「奈良出身の」、「奈良に勤めている」、「奈良について研究している」、その他でもよい。こうした「の」は、2つの名詞の関係を構成する事実という文脈によって、その意味が決定される。この場合は、映画のストーリーの展開をみれば、「奈良に住んでいる」の意であることが分かる。「奈良」は「奈良市」のこと。背景が奈良に移る場面VI以下で述べる。

⑥の「ええ」については29巻の⑬参照。

I-3 木村先生をめぐって(2) (⑦～⑬)

歩きながらの会話がさらに続き、清は林先生に木村先生への紹介を依頼する。

清「⑦もしよろしかったら、ご紹介いただけませんか。」

林「⑧いい機会だから、紹介しましょう。」

清「⑨ありがとうございます。」

⑩木村先生にご意見をうかがいたいことがあるんですが……。」

林「⑪そうですね。」

⑫それでは、2時ごろ、私の研究室に来てください。」

清「⑬はい、うかがいます。」

⑦の「もしよろしかったら」の「よろしい」は「よい」の改まった言い方で、美化語(丁寧語)に分類される。29巻⑭の「……奈良へ遊びに行くんですが、よかったら、いっしょに来ませんか」の「よかったら」と同じく、「あ

あなたにとって都合がよかったら」「あなたが希望すれば」などの意で、何らかの提案や勧誘を行う場合、相手の意志を尊重することを表す前置きの慣用表現。話し手自身の都合については、「よかったら」は使うが、「よろしかったら」はふつうは使わない。「ご紹介いただけますか」は「ご～いただく」という謙譲語形式の可能形の用法で丁寧なお願い。29巻⑨には「ご覧いただけますか」がある。そこでも触れたが「ご～いただけますか」という可能形の用法は学習者は一般に苦手なので要注意。また「ご紹介していただけますか」とならないように注意。なお、29巻では「～くださる」が多く、この30巻では「～いただく」が多いので一言するが、同一の場面で「ご（紹介）いただけますか」と「ご（紹介）くださいませんか」とどちらを選ぶのがよいかという質問があるが、これに答えることはたいへん難しい。ふつうは構文の違いの説明だけですませてしまうことが多い。同一の場面で「くださる」という相手中心の言い方と「いただく」という自分中心の言い方とがどのような原理に基づいて選択されるのか、つまり意味上の差異については、ほとんど研究されていない。いずれも「恩恵」の授受であるが、相手（与え手）をあらわにしてその厚意に直接的に謝するなら「くださる」が、自分の受ける利益に基づいて間接的に相手に（あるいは不特定の相手に）謝するなら「いただく」が選ばれる、というぐらいは言えるかもしれない。したがって、眼前に敬意の対象がいれば「くださる」のほうが敬意を直接に表せることになる。学習者の日本語では逆になって違和感を覚えることがある。一般に「くださる」は与え手を明らかにしなければ使えず、「いただく」は与え手を明らかにしなくても使えるという特徴がある。例えば、ある品物について、

〔1〕 これは、いただいた物です。

とはいえ、

〔1〕' これは、くださった物です。

とはいえ、シタクスと意味の問題である。

⑧の「いい機会だから」と「だ」の部分が「です」になっていないのは、林先生の清に対する発言がつねに敬意表現（デス・マスの体）のうちの最低

のレベルのものしか使っていないことの表れとっていいだろう。これについては、19巻の「から／ので」の解説を参照されたい。「紹介しましょう」の「～ましょう」については、29巻④の「はい、読ませてもらいましょう」の「～ましょう」と同じく、「～ます」の断言性を避けたやわらかい言い方——したがって丁寧さが増す——として扱いたい。

⑨の「ありがとうございます」については①の「おはようございます」の項を参照。

⑩の「ご意見」は「ご」による尊敬語化。「木村先生の意見」を意味する。「お／ご」については29巻でしばしば触れた。「うかがう」は「聞く（耳にする）」「質問する」「訪れる」の3つの意味を持つ謙譲語だが、ここでは「質問する」の意で、29巻⑤で既出。「訪れる」意の用法は⑬に後出。「うかがいたいことがあるんですが……」の「～が」については、後続文への話題の導入の言い方として用いられる場合のあることを29巻の

④私の論文ですが、……

⑤……と奈良へ遊びに行くんですが、……

⑥ちょっとうかがいますが、……

などで扱った。29巻では後続の文が明示されており、話者の目的はその後続文にあった。この⑩の「～が」がもし同じものとすれば、⑦の「ご紹介いただけませんか」という目的文に、付け足しとして、後置した文ということになる。一方、後続の文を明示しない、というより明示しがたい言いさしの文——文を中止する言い方——も日本語ではふつうであるから、理由を後で述べたというだけで、この「～が」は終助詞化したもの、断言をやわらげるもの、として扱うこともできる。導入か中止か、一方には決めがたい。後出⑩も同様である。（3.2.参照）

⑪「そうですね」は相手の提案・依頼・質問などに対して、ほとんど反射的に出る応答詞的表現。29巻②⑤⑦参照。

⑫の「それでは」は単に「では」だけでもよい。また「（それ）じゃ」となることも口語では多い。

⑬の「うかがいます」は「訪れる／訪問する」の意の謙譲語。この意味では初出。⑩⑳の「うかがう」を参照のこと。

II 自分（清）の研究室で（⑭～⑰）

路上での会話が終わり、林先生・清の2人が時計台の見える校内に消えると、画面は一転し、清の研究室が映る。同僚も机に向かっている。電話が鳴って清が受話器をとる。この場面は電話のやりとりだけである。

清「⑭はい、小川です。」

林「⑮ああ、小川君。」

⑯木村先生がおいでになっています。」

清「⑰はい、すぐまいります。」

⑭は受話器を取り上げてすぐの応答。先方が何と言ったかは不明だが、「小川君の研究室ですか／小川君はいますか／その他」が考えられる。また、冒頭に「はい」と言っている、先方の何かのことばに答えるものとは限らない。単に電話口に出たことを示す合図の場合もある。また、何か事を始めるに当たって、無意識のうちに使い掛け声的なことばだと解釈してもいいだろう。日本語ではよくあることである。「小川です」の「です」を「でございます」と言うか否かは多分に職場の習慣や個人の習慣によるが、先方がだれか分からない段階では「です」が多い。いちいち「こちらは……」と言う必要のないことは指導したい。

⑮の「ああ」は②と同じく確認。

⑯の「木村先生がおいでになっています」の「おいでになる」については④を参照。ここでは「いる」の尊敬語。

⑰の「はい、すぐまいります」は、林先生が「来てください」とは言っていないが、朝の約束（⑫⑬）が前提になっているので、先方の意図がすぐ分かったことを示す。「まいります」は「行く」「来る」の謙譲語で、ここでは「行く」の意。「まいる」という辞書形だけで使われることはまずない。

ここで⑬のように「うかがいます」とも言えないことはないが、「先方のいる場所へ行く」の意だから「まいります」の方が適當。

Ⅲ 林先生の研究室で (⑬～⑭)

電話が終わると、画面は林先生の研究室に変わる。そこで林先生と木村先生が話している。清が来て、木村先生に紹介され、清は自分の研究内容や希望を述べ、終わりに木村先生の自宅を訪問する約束をする。この場面Ⅲはこの映画の中心的場面のひとつで、初対面のあいさつ、研究内容の紹介、希望の述べ方、訪問の約束などが指導項目となる。以下のように5つに小区分される。

Ⅲ-1 木村先生と林先生 (⑬～⑭)

林先生と木村先生が対談している。途中でノックの音がする。

林 「⑬今度は、いつおいでになりますか。」

木村 「⑭そうですね、来月の中頃に。」

林 「⑮どうぞ。」

⑬の「今度は」は、現在を基準にして最も近い将来に実現される時点を指す。「次(の回)」は」と同意。「今度」自体は、現在行われている(あるいは行ったばかりの)ことも、近い過去に起ったことにも、近い未来にも使われるので、文脈上の注意が必要。「おいでになりますか」については、④⑬で既出。なお、「今度は、いつ……」と言っているところから、木村先生はしばしば大学へ、あるいは林先生のところへ来ていることを示す。おそらく研究の必要からであろう。このことを学習者に感じとらせたい。

⑭の「そうですね」については⑪参照。応答詞的用法のこの文は、文脈上多義的であり、意味の違いはイントネーションの違いによるので注意させたい。質問文に対するこのことばのイントネーションは「ソーデスネー」がふつう。「来月の中頃に」の後続文を言わせるとすれば、林先生に対する木村先生の言語待遇を決めるのが先決。木村先生は林先生や清に対して丁寧語

以外は使っていない。(ただし、この映画ではそうだというだけで、現実の社会でも上位者は下位者に対して尊敬語や謙譲語を使わないというわけではない。)

⑳の林先生の「どうぞ」はノックの音に答えたもの。「どうぞおはいり(ください)」の意。「どうぞ」はこの解説書では美化語(丁重語)扱いをしている。「どうぞ」が適合するのは「です・ます」レベル以上の文だからである(29巻㉔参照)。なお「どうぞ」は、国文法では相手に何かを勧める場合の丁寧なニュアンスのある婉曲表現とされ、敬語扱いはされていない。

Ⅲ-2 初対面のあいさつ(㉑～㉗)

ノックの音、「どうぞ」に続いて、清が入ってくる。林先生が木村先生に紹介する。

清 「㉑失礼いたします。」

林 「㉒木村先生、ご紹介いたします。

㉓こちらが、講師の小川清君です。」

清 「㉔小川と申します。

㉕よろしくお願いいたします。」

木村「㉖木村です。」

林 「㉗さあ、そこへ。(席を指す)」

㉑の「失礼いたします」は、「失礼します」(29巻㉘)より一段丁寧なあいさつ語。「失礼」は礼を欠くことを表すから、無遠慮だと判断される場合には広く使える。ここでは、遠慮のいる人の部屋に入るとき、または辞去するときの慣用句として扱っていい。「失礼いたしました／しました」という完了形はおもに過失に際しての詫びや、用件が終わって辞去するときに用いられる。遠慮のいらない場合、とっさの場合などには「失礼」だけでも用いられる。「いたす」自体は謙譲語だが、現在は「～ます」の形でしか使われないから、「～いたします」は美化語(丁重語)扱いが適当とする説もある。

⑳の「ご紹介いたします」は「ご～いたします」という謙譲語化の類型表現。謙譲語を構成する「お」については、29巻の㉑で触れた。この場合の「ご」についても意味（かくれている格関係）はほぼ同じであり、基本的に<(私)が(あなた＝木村先生)に(小川清)を>の構造を持っている。

㉒の「こちら」は「(ここに)いるこの人」の意で、本書の分類では美化語(丁寧語)。もともと「こちら・そちら・あちら・どちら」のひとつで方向を表す語。元来方向を表す語をもって「人」を指す語に転用したのは日本語の敬語の伝統である。直接指示性を嫌う(あるいはタブー視する)のが敬語の基本的性格であると考えていい。「こちらが／は……です」は人を紹介するときの最も一般的な形式。「これ」が使われるのは、被紹介者が身内か、かなり親しい間柄に限られることに注意させる。林先生は清に対して「～君」という軽い敬称と丁寧語以外に尊敬語や謙譲語は全く使っていないが、「こちら」を「これ」にすると、たとえ下位者であっても、ぞんざいすぎ、清に対してばかりか木村先生に対しても失礼の感を与える。美化語(丁寧語)は聞き手に対しても丁寧意識を大いに持っている。「小川清」というフルネームもセリフとして初出。清は29巻で「先生」と呼ばれたことがあるが、その身分が「講師」であることも、ここで初めて判明したことになる。日本の大学の教師の身分構成は、ふつう、助手・講師・助教授・教授であることを教えてもいいだろう。通常「講師」といえば専任講師(身分が保証される)であり、非常勤講師(臨時契約)と区別される。

㉔について。この場面で清は木村先生に初めて会ったのだから、「初めまして」と言うべきではないかと疑問に思う学習者もいるにちがいない。自己紹介は義務的であっても、「初めまして」は、あるほうが望ましいが、義務的ではないということでもいいだろう。「小川と申します」の「申す」は「言う」「告げる」の意。本書の分類では基本的性格を考えて謙譲語に入れているが、その用法から「丁寧語(丁寧語)」として扱われることも多い。特に「……という名である」という意味のときは古くから丁寧語扱いとされることが多かった。また、「いたす」「まいる」「おる」「存ずる」などと同じく、「ます」と

結びつかないと現在ではほとんど——特に文末では——使われないという実情がある。その意味では、本書の分類の内容を変更して「美化語（丁寧語）」ないし「丁寧語」に入れてもさほどのさしつかえはない。しかし、学習者には自分や自分側以外についても使う危険があるので、謙譲語のままとした。

「申す」の美化語（丁寧語）用法の典型的な例は次のようなものである。

〔2〕 あちらに見えますのは、〇〇と申すお城でございます。

また、「申す」が「申される」という形で尊敬語意識で使われ、その正誤をめぐってしばしば話題になるのは、「申す」が早く（平安時代）から丁寧語化し、しだいに敬度が低く感じられるようになったからだと考えられている。たとえば日本人が使っていても、指導上は誤用としたい。大抵の場合「おっしゃる」に直すことができるからである。また、学習者は「申す」と「申し上げる」との区別を丁寧さの違いだけと誤解していることがあり、自己紹介等で「〇〇と申し上げます」などということがある。「申す」の格は「～が～を」であり、「申し上げる」の格は「～が～に～を」である。なお、「申す」は「申し込む」「申し入れる」「申し出る」など多くの複合語を作ることがあるが、その名詞形も含めて、これらは謙譲語ではなく、常語（普通語）扱いとされている。

㊦の「よろしくお願いいたします」は同じ表現が、29巻の㊥にあるのでここを参照されたい。ただし、29巻では論文を読んでもらうという具体性があったが、この自己紹介ではそれがない。それだけ分かりにくいわけであるが、29巻の㊦や㊥の場合と同様、慣用表現として直訳的説明はできるだけ避け、くどくどしさや押し売りの感じを与えないようにしたい。日本人にとっては、自己紹介時の単に丁寧意識に根ざした慣用的な形式表現であると理解させたい。（ことばの含意するところは、今後、交際していく上でどのような世話になるかわからないが、そのときは、好意ある取扱いを頼むということであろうが、文化論的には新しい人間関係への一種の入門儀式——イニシエーション——のようなものである。）

㊦木村先生が「そうですね」以外に、文末をはつきり言ったのは、この「木村です」が最初である。この「です」から丁寧さのレベルを感じとらせ

たいものである。木村先生が女性なら、たとえ同じ立場にあっても「木村で
ございます」となるのもめずらしいことではないだろう。

②⑦「さあ、そこへ」の「さあ」は、ここでは、うながしの意の感嘆詞。「さ
あ、たいへんだ／困った／どうなりますか」などと区別。「そこへ」は場所
の指示。この場合、丁寧意識が強ければ「そちらへ」と言えないこともない
が、林先生の清に対する一連のことは遣いにはそぐわない。

Ⅲ－３ 研究内容をめぐって(1) (②⑧～③①)

清が座ると、林先生は木村先生に清の仕事を紹介する。

林 「②⑧小川君は、いま、奈良時代の建物について研究しております。」

木村 「②⑨そうですか。」

清 「③⑩よろしかったら、ご意見をうかがいたいことがあるんですが……。」

木村 「③⑪私に分かることでしたら……。」

②⑧の「小川君は……について研究しております」の「～ております」は、
本書の分類では謙譲語としている。補助動詞としての「～ておる」は共通語
では「～ております」という形で使われるのがふつうであるから、これを丁
重語とみなす論者も多いが、丁寧語という概念の不徹底から、「～ていらっ
しゃいます」と尊敬語で表すべき相手に対しても使ってしまう危険があるの
で、謙譲語扱いのほうが安全である。一方、「～ておられる／ます」という
尊敬語形式（特に書きことばの場合）もかなり一般化しているので、謙譲語
の用法と尊敬語の用法とを区別して扱う必要がある。これは「申す」と「申
される」の用法に似ている。

「奈良時代」は日本が奈良（現奈良県奈良市およびその近郊）に都を置い
た時代（710～794）を指す。その最盛時は聖武（しょうむ）天皇の天平（て
んぴょう）年間（729～749）で、優れた美術品・建築が多く残され、美術史
上では天平時代と呼ばれる。奈良時代はまた日本の文学の確立期でもあり、
万葉集・古事記・日本書紀・風土記などができた。古代の政治・文化の中心

地であったことから、考古学の研究対象としても貴重な土地である。

㉘「そうですか」は了解を示す。木村先生の声はやや高いが下降調のイントネーションに注意。この「そうですか」は相手の言ったことに対する納得の相づちに近く、会話では多用される。丁寧な応待を意味するから、黙っていたり、「そう」だけであったり、「はい」だけであったりしてはいけない。

㉙の「よろしかったら」は、㉗の「もしよろしかったら」と同じく、「よかったら」の美化語（丁寧語）で、相手の意志を尊重し許可を求める表現。「あなたにとってさしさわりがなければ」の意。㉗および29巻の㉔「よかったら」を参照されたい。「ご意見」は「あなた＝木村先生の意見」の意で尊敬語。「うかがう」は「聞く／質問する」の謙譲語。「お聞きしたい」より丁寧度が高いと考えられている。「～たいことがあるんですが……」の「～が……」は、文を中止する言い方のひとつ。㉚と同じとみてさしつかえないが、㉚では単に理由の付け足しとして述べられており、「～が」も終助詞に近く、後続文を考えることはかなり困難であった。この㉙では、あえていえば、「お教えいただけますか／お時間はいただけますか／お訪ねしてもよろしゅうございましょうか／……」などが考えられる。しかし、くりかえしになるが、かりに後続文を復元できたとしても、こうした言い方は省略ではなく、日本語の待遇表現の完結したひとつとして扱いたい（3.2.参照）。

㉚「私に分かることでしたら……」についても、㉙の「～が」と同じく、文の中止の一用法である。「～たら、お役に立ちましょう／ご希望にそいましょう／……」などの意であるから、この「～たら」による中止は謙譲の気持ちを表していると言ってよく、後続文を明示すれば、その後続文に表現意図の重点が移り、話し手の謙譲性が薄れる危険がある。なお、「私に分かる」の「私に」は「分かる」の主体（対象ではない）を表しており、「できる」「見える」「聞こえる」などと共通する。「（そのことが）私に分かる／私に（そのことが）分かる」と考えてよい。

Ⅲ－4 研究内容をめぐって(2) (㉘～㉚)

清と木村先生の会話が続く。

清 「㉔いま、奈良時代のかわらについて、調べております。」

木村 「㉔あつ、かわらの写真なら、私のうちにありますよ。」

清 「㉔そうですか。」

㉔拝見させていただきませんか。」

㉔の「かわら（瓦）」は、屋根をふくために使うもので、粘土を固めて焼いたもの。日本では、6世紀ごろ中国から伝わり、江戸時代に普及した。種々の色があるが、日本では灰黒色が多い。かわらは国によりその形が異なる場合が多いから、写真や絵で示すのがよいだろう。この場合は研究対象としての奈良時代の建物に使われた古いかわら。後出の画面（V—1, V—2, 特にIX—4）を参考にするのがよい。「調べております」の「～ております」については㉔参照。

㉔の「あつ」は、とつぜん思い出したときの感嘆詞。「かわらの写真なら」の「～なら」は、相手の話題を受けとめ、自分の話題として再提出するときの用法。形は仮定形ではあるが提題の「は」に近い。29巻の㉔に「ああ、法輪寺でしたら、あの橋を渡って…」というセリフがあるが、この「～でしたら」と同じ働きである。

〔3〕 Q 郵便局はどこですか。

A 郵便局なら／でしたら、この道を……

なお、この㉔の文末の「ありますよ」の「よ」は強調であるが、木村先生（上）から清（下）に対する場合であるから言えることであり、その逆は待遇表現として不可能であることを特に指導したい。友だちことばが、改まった場面にも持ちこまれる危険が多いにあるからである。

㉔の「そうですか」は㉔と同じ。

㉔の「拝見させていただきませんか」については「～させていただく」と「（～ません）でしょうか」に特に留意したい。「拝見する」は「見る」の謙譲語。「～させていただく」については、29巻の㉔に「読ませても

らいましょう」がある。「～させてもらう」も、狭義の敬語こそ使われていないが、間接的な謙譲表現であり、「させていただく」は直接的な文字通りの謙譲表現である。字義的には自分の希望や行動を相手の了解・許可のもとに実現するというつつしみを表す形式である。自分の自由意志であっても改まった場ではこの形式はよく用いられる。使役と授受表現の組み合わせは、形の上でも意味の上でも、多くの学習者にとって習得しにくいものであることに留意したい。「(～ません) でしょうか」という「(丁寧な否定形+) 丁寧な推量形+疑問助詞」の形は、文末形式の中でもっとも高い丁寧さに属する。もちろん、丁寧度は文末の助動詞の部分だけのものではなく、

〔4〕 行かないわけにはいきませんでしょうか。

のように先行する事柄の部分の形式も関係する。「でしょう」は「です」と異なり、形容詞文・動詞文の肯定・否定・現在・過去のすべてに承接するという特徴がある。したがって、「～ませんです」と言えないのに、「～ませんでしょう」と言えることに疑問を持つ学習者もいる。「でしょう」を「です」の推量形とするだけでは不十分なことを示している。この㉔について、次のような丁寧さの段階についても意識させたい。

〔5〕 拝見させていただき	{	a. ないか。
		b. ないですか。
		c. ませんか。
		d. ないでしょうか。
		e. ませんでしょうか。

上例の文末 a. は、デス・マス形ではないので明らかに異なる対人関係（聞き手）でないと使えないが、b. ～e. については、ほぼこの順序で丁寧度が増すと指導していいだろう。その意味では、またそれぞれが対人関係が異なると言える。すると、学習者は<どれを><いつ><だれに>使うのが適切かという疑問を持つことがある。これは簡単には答えられない。前後の文脈・丁寧さのレベルと合致しているか否かにかかわっているからである。なお、「いただけますか」という可能形に注意させる。29巻㉔㉕参照。

Ⅲ—5 木村先生のお宅を訪ねることについて (㉞～㊲)

清のお願いが木村先生のお宅への訪問の話に発展する。

木村「㉞ええ、いいですよ。

㉟うちへ来てくれますか。」

清「㊱ありがとうございます。

㊲先生のご都合のよろしいときに……。」

木村「㊳では、あさっての3時ごろは、どうですか。」

清「㊴はい、けっこうです。

㊵では、3時におうかがいたします。」

㉞については、もう少し丁寧に言うとするればどんな言い方になるかという質問をしてみたい。木村先生→清というこの場の関係では、「ええ、結構です(よ)」ぐらいであろうが、人間関係を別にすれば、「はい、結構です／で」「はい、よろしゅうございます」その他がありうるだろう。無理がない限り多様な表現形式を紹介したいものである。

㉟の「うちへ来てくれますか」について。「うち」は自分の家、自宅。木村先生が清に対して尊敬語や謙譲語を使っていないことは、林先生の清に対する場合と同じ。「～てくれる」は話し手の気持ちを充足させるというのが基本的意味。ここで、木村先生が「うちへ来てくれませんか」と言えば、この文脈に合うものとなるか否か微妙である。「来てくれますか」は相手に対する期待の直接的表明であるが、「来てくれませんか」は、期待と共に相手の都合を聞くニュアンスが強くなる。㊱の「ありがとうございます」は、「来てくれますか」が㉟の「拝見させていただきませんか」の質問(要求)に対する直接の許諾となっているからである。

㊲「ご都合」は「都合」の尊敬語化。「よろしい」は「いい」の美化語。「ご都合のよろしいときに…」は、「先生にとって都合のよいときならいつでも、こちらはその都合に合わせる」の意。前出の㊳㊴などと同様に文を中止した言い方。「～ときに」の後続文は、先生を主体にしても自分(清)を

主体にしても表せる。先生が主体なら「(～ときに) 決めてください」など。話し手が主体なら「(～ときにいつでも) うかがいます」など。この後続文を学習者に言わせれば「お訪ねします」「まいります」その他も出てくるだろう。なお「ご都合のよろしい」の「の」は習得しにくい場合が多い。

④⑩「あさって」は、あしたの次の日。「あさっての3時」の「の」も初学者の多くは苦手。「あさって3時」となりやすい。「～は、どうですか」は話し手の提案と相手の都合を聞く言い方。「どうですか」の内容は文脈による。美化語(丁重語)化すれば、「～はいかがですか」となる。

④⑪「はい、けっこうです」の「けっこう」は多義的だが、ここでは、応諾を表す。辞退を意味する「けっこう」の場合は、「いいえ」や「もう」がつかうのがふつう。応答詞的用法や、「良い・美しい」などを意味する場合は美化語(丁重語)に近い。事実、丁重語に分類する人もいる。29巻の④⑪には「けっこうなお庭ね」がある。

④⑫の「では、3時におうかがいいたします」の「おうかがいいたす」は「うかがう」(「訪問する」の謙譲語)をさらに「お～いたす」という謙譲語の型で包み込んだもの。「うかがう」自体が敬語であるとすれば、二重敬語ということになる。二重敬語は、謙譲語・尊敬語を問わず、日常よく使われることばの場合は、それ自体が立派な敬語であっても、どこか敬意が足りないような気がして、もう一度敬語化してしまうものを指す。丁寧と言おうとする意識が優先してもととの敬語の性格を忘れさせてしまうのである。「お召し上がりになる(←召し上がる)」「お休みになられる(←お休みになる)」など日常かなりよく耳にする。一概に誤用とは言えないが、必要にして十分な敬語とは何かを考える人々からはきられる。簡潔な敬語形式の指導という立場からはやはり避けるべきものだろう。この場合は、初対面の木村先生(専門を同じくする著名な先輩と考えられる)に対する緊張感が「うかがいます(→おうかがいします)→おうかがいいたします」と形式の選択を一挙に飛躍させたのであろう。とはいえ、「おうかがいします/いたします」が二重敬語という意識のない日本人も多い。それほど一般化しているということでもある。ま

た「うかがう」は、他面で「窺う」というむしろ非敬語的語感を持つ意味も合わせ持っているからこそ、「お～する／いたす」で敬語化しやすいのである。

IV 大和の田園で (④③～④⑦)

画面は一転し、池のほとりを3人が歩いている。向こうに見えるのは薬師寺の東重の塔。池のほとりが画面から消えると、3人は民家（農家らしい）のかたわらの道を歩む。白壁の土蔵が映える。

清 「④③お母さん、次は、どこをご覧になりますか。」

恵美子「④④（清に）母は、唐招提寺が見たいと言っていたわ。

④⑤（母に）ね。」

清 「④⑥じゃ、そうしましょう。」

母 「④⑦ええ。」

④③の「どこをご覧になりますか」の「ご覧になる」は「見る」の尊敬語。29巻の④③に「ご覧いただけますか」、④②に「どうぞ、ご覧ください」がある。そこでも触れたが、「ご」と「覧」は切り離せない一語となっているが「ご～になる」の一例として扱っていいだろう。この家族の場面は30巻ではここで初めて出てくるわけだが、清と母（義母）とのことば遣いは特に注意させたい。29巻のくり返しになるが、日本の義理の親子の間柄では、少なくともことば遣いの面で、かなりよそよそしい感じを与えるのが否めないのも現実であることを知らせたい。実の親子と比べれば、ウチ意識よりもソト意識のほうが強いと言わざるを得ないだろう。相対的にソトとして扱うのが礼儀であると考えられてきたのが日本の伝統であると言ってよいだろう。ただ、常にそうだというわけではない（家族にもよるし、くつろいだ場面か否かにもよる）ということは、一言つけ加えたいものである。

④④は恵美子による母の気持ちの代弁。間接話法を学習させる機会でもある。清・恵美子という夫婦のあいだでは原則的に敬語を使っていないのが29巻からの主旨である。夫婦ならつねに「デス・マス」を使わないというわけでは

ないことは教えなければならない。なお、恵美子が夫である清に対して「母は」と言うのは気にかかる人もいるかもしれない。日本の親族呼称では、眼前にいる年長者をウチに対して言うときは敬称を使うのがふつうだからである。しかし、夫婦のあいだであっても、またその場に指示される本人がいたとしても、「母は／父は／兄は」のような言い方が全くないわけではない。ウチ・ソトだけで考えれば、恵美子が眼前にいる母親を「母は」というのは、夫である清をソト扱いにしていることになるが、そうした意識ではなく、母を第三者、つまり話題の人として扱ったにすぎなく、それが代弁、間接話法となって表れたと見てよいだろう。29巻⑥の「母はおとうふが好きよ」も同じだと考えられる。ここで清が母に聞いているのに恵美子が答えるのは、恵美子が母の気持ち（清に対する遠慮）を察してのことかもしれない。文末の「わ」は女性専用の終助詞。自分の主張・判断などを相手に納得させたり自分で確認したりする気持を表す。上位者や改まった場面では使わないのがふつう。「唐招提寺」については、次の場面V参照。

④⑤の「ね」は母に向けられたもの。確認や同意を求める用法。強く言えば「ねっ」となる。(29巻⑩参照)

④⑥の「じゃ」は「では」の口語表現。先行する文の内容を受けついで、次の行動や考えを表明するための接続詞。「そうしましょう」は、相手の意志を尊重し、自分も同意することを表す丁寧表現。勧誘でないことに注意。

V 唐招提寺で (④⑧～④⑪)

この場面は、母の希望でまず唐招提寺を見物し、続いてかわら屋根のある土塀に沿った道を歩く。清および木村先生の研究テーマと関連させている。

V-1 屋根を見ながら (④⑧～④⑨)

大きなかわら屋根が画面いっぱいに映る。母・恵美子・清の3人がそれを見ている。ここは「唐招提寺」。この寺は、759年、唐の高僧鑑真（がんじん）が聖武天皇の命を受けて創建したもので、鑑真に従ってきた唐の工人の手に

なったといわれる。天平時代の最も完備した建築物として有名。境内にはいくつもの建物があるが、3人が見ているのは金堂（こんどう）の屋根。その雄大さで特に名高い。奈良市五条にある。

母 「㉔ここの屋根は、きれいな。」

恵美子「㉕そう。」

㉔の「ここの屋根」は「(ここにある)この寺(建物)の屋根」のこと。画面は遠近感がないので分かりにくいですが、現場を知っている人にとっては、3人のいる所と屋根とはかなり離れている。しかし、自分たちがいるこの寺、つまり<同じ境内>という場所意識が「ここの」と言わせたのである。「きれいな」という言い方は、女性が多く使う表現。男性は「きれいだな」とやりやすい。「な」は上昇調で長く発音されている。同意を求める意だけでなく、感嘆の気持ちも込めている。

㉕「そう。」はここでは同感・同意を表す。「そう。」という形は、くだけた場面で女性が多く使う。男性が使わないわけではないが、男性の場合は「そうだな」となりやすい。「だ」(助動詞/語尾)は断定・断言のひびきが強いので、この形のまま文を終えることを女性は避ける傾向がかなり強い。「きれいだ→きれいな/よ/だわ」のように。

V-2 木村先生の研究について (㉖～㉙)

唐招提寺を見ると、清が木村先生と会う約束の時間が近づいている。寺をあとにして、3人は古都らしい雰囲気のある、かわら屋根のついた土塀に沿った道を歩く。

清 「㉖そろそろ、木村先生をおたずねします。」

母 「㉗ああ、そうでした。」

恵美子「㉘木村先生は、何のご研究をなさっているの。」

清 「㉙先生はね、こういう古いかわらにおくわしい方なんだよ。」

恵美子・母「㉚そう。」

⑤の「そろそろ」という副詞は、清の行動の実現（木村先生との約束を果たす）からみて、その前に許される時間的余裕の限度が近づいているので、あわてる必要はないが、同じ状態をこれ以上続けることは避けなければならない、という次の行動へ移るときの時間についての話し手の判断を表す。29巻の⑤には、同じ清の「そろそろ行きましょうか」がある。「おたずねします」は「たずねる」（訪問する）の謙譲語化。「お～する」という型は、一般のニュートラルの動詞を謙譲語化して使うときの最も一般的な型で、この映画の題名にも採られた。「お+動詞連用形+する」という形式の動詞連用形の部分には、どんな動詞でも来うというわけではない。特に自動詞は入りにくい。その意味では「お～になる」という尊敬語形式よりも窮窟である。また、謙譲語形式ではあるが「お」という敬意の接辞を必要とするので、この「お」に氣をとられて、尊敬語に——他人の行動に——使ってしまうことがよくある。誤用とされながらも、一般の人びとの間で尊敬語だと思って使われる傾向が強いので注意を要する。「お～になる」の「お」は尊敬語で、「お～する」の「お」は謙譲語だとするのは理論的には無理な分類であるが、指導に当たっては深入りせず、「お～になる」「お～する」全体が尊敬語であり謙譲語であるとしておくのがいいだろう。

⑥母の「ああ、そうでしたね」の「た」は回想・確認の気持を表す。「た」自体はテンス・アスペクト・ムードの機能をあわせ持つ語（国文法では助動詞）であるから、文脈によってその意味が決定される。ここでは、清のことに誘発されて、母も清の約束を思い出したことを表す。とつぜん何かを思い出した、気がついたというときにはよく用いられる。「あっ、あしたは試験があった」など。何かの事実（ここでは約束）が過去においてすでに決まっていた、あるいは確かに話題にのぼっていた場合に限られる。ただし、この場面で「ああ、そうですね」と言えないわけではない。その意味で「た」には相手への気づきも含まれているといえる。「ね」は「あなたの言うとおりです」を含意している。

⑦について。恵美子も清と同じ立場に立って、木村先生（恵美子にとって

は常に話題の人だが)には敬語を用いていることに留意させる。「ご研究」は「研究」の尊敬語化。「なさる」は「する」の尊敬語。ここで学習の進んだ者によっては疑問に思うことがある。「なさっているの」ではなくて「なさっていらっしゃるの」と言うべきではないのかと。これはたいへんむずかしい問題であり、考え方によっては正誤にかかわるが、「していらっしゃる」(ただし「ご研究して」は不可)「なさっている」「なさっていらっしゃる」の中庸をとったものという程度にとどめておくのがいいだろう。後にくる補助動詞の部分が前にくる本動詞より敬意の低い語であることは、一般論としては好ましくないが、補助動詞の文法性(形式化)を考えると、「語」と「語」の連続という考え方だけでは処理できない。実態調査でも回答はさまざまである。それとは別に「何のご研究をなさっているの」については、初歩的なことだが、構文の練習をしたい。次の a., b. の違いである。

〔6〕 a. 何のご研究をなさっているの。

b. 何をご研究なさっているの。

学習者は一般に a. は苦手であり、「～の～を＋動詞」の型は、b. の「～を＋動詞」という型よりはるかに身につけにくいようである。特にサ変動詞は漢語の部分と「する」とを切り離して格助詞を入りこませる場合に、この格助詞を忘れがちである。「日本語の研究します」「九州の旅行しました」のように。文末の「の」は女性が多く用いる終助詞。児童の場合は男女ともによく使う。基本的には軽い断定を表し、文末形式のうちでは断言形のみにつく。この場合のように、疑問文では上昇調の発音となる。改まった場面や上位者には使わないようにしたいこと、他の多くの終助詞の場合と同じである。

③の「先生はね」の「ね」は間投助詞の用法。一文の中でも、文節相当の単位のあとには、つけようと思えば大抵つけられる。この場合「先生は」に注意を向けさせる一種の強調といってもいいだろう。日本人の会話では時によりかなり多いが、学習者には多用しないように指導したい。こま切切的な表現、子どもっぽい表現になる危険があるからである。「こういう」は、画面で見られるとおり、現場指示の「こ・そ・あ」の用法のひとつで、話し手の近くにあ

るものを、話者の頭の中にあるもの（一般的なものであっても、特殊なものであっても）の一例として示す指示詞的連体詞である。「このような」とも言えるが、書きことば的感じが強い。29巻④の「こんな」参照。「おくわしい」は「くわしい」の尊敬語化用法。この場合は木村先生自体が「くわしい」の主体であるので分かりやすいが、形容詞につく「お」は、その用法も意味も説明しにくい場合が多い。「～方（かた）」は「人」の尊称だが、独立して使えない接尾辞。「この／その／あの方」などは早くから習っているはず。

⑤④「そう」は恵美子・母が異口同音に言う。「なるほど、そうですか」の意で了解を表す。「そうですか」と丁寧体が使われていないだけ、相手との心やすさ、改まりの少ない気持を表している。

VI 別れ道で（⑤⑤～⑥①）

土堀に沿った道を通り、道案内（観光案内）の看板の立っている四つ角らしい別れ道にくと、清は二人と別れる。清と母は、ここでも、丁寧におじぎをする。恵美子と母は、ちらっと看板を見て道をたしかめる。

清 「⑤⑤（母に）では、ここで失礼します。」

母 「⑤⑥どうぞ。」

恵美子「⑤⑦もう少し見物して、夕方には帰るわ。」

清 「⑤⑧うん。」

⑤⑨（母に）では、お気をつけて。」

母 「⑥①ええ。」

⑤⑤「ここで失礼します」は、丁寧な別れのあいさつ。「失礼します」自体は、自分の都合で相手に迷惑をかけると判断したときのあいさつ語で、広く使われる。敬語の分類では謙譲語に入れられるが、慣用句として扱いたい。

「ここで」があれば人と別れるときに限られる。改まった人間関係では別れのあいさつも「さようなら」はあまり使われず、「失礼します／いたします」のほうが多い。

⑤の「どうぞ」は、相手が「失礼します」と言ったことに対する丁寧な返答で「どうぞ、お気づかいなく～」を意味している。「どうぞ」の基本は、丁寧な依頼・お願い・すすめのことばで、文の型としては「どうぞ～ください」である。

⑦の「もう少し見物して」については、「(あなたは帰るが) 私たちは」の感じをつかませたい。「見物」は楽しみ・趣味として場所や物などを見ること。当初から何らかの学習目的がはっきりしている場合は「見学」になりやすい。「夕方には」の「には」は学習者にとって習得しにくいものである。なぜなら「夕方」と「夕方に」の区別がむずかしい上に「は」の有無による意味の違いが加わるからである。「わ」については④参照。

⑧「うん」は親しい間柄、しかもくだけた場面での応答詞。29巻でも清が恵美子に対し(⑩)、恵美子が母に対して(⑪)、 「うん」を使ったセリフがある。「はい」のくだけた用法と言ってよいが、「うん」と「はい」とは、くだけや改まりによる違いだけではない。「うん」のほうが用法がせまい。

⑨の「お氣をつけて」は「氣をつけて」の尊敬語的用法。人を送り出すとき、危険な仕事を見守るときなどに使い、相手の安全を祈るあいさつ語に近い。「氣をつける」のような連語を尊敬語化する方法では意見が分かれることがある。「お氣をつける」か「氣をおつけになる」ということである。「おかぜをひく」「かぜをおひきになる」も同類である。「氣をつける」を一語相当の動詞として扱えば「お氣をつけになる」とも言える。しかし「おかぜをひきになる」とは言えないであろう。また「お氣をおつけになる」「おかぜをおひきになる」と言えば丁寧さがかえって不自然なものとなる。こうした慣用的連語や、複合動詞(「食べ始める」など)や、動詞に「～ている／しまう／……」など補助動詞のついたものを敬語化するときは迷うことがあるが、広く使われている語形に基準を求めていいたいと思う。その場合、簡単で、あるいは言いやすく、敬意の示せる形とは何かということに留意する必要がある。なお、学習者は、「お氣をつけて」を完全文で言おうとして「お氣をつけてください」と言うことがあるが、不自然であろう。別れの場面で完全文

を求めるとすれば「お氣をつけて、行ってらっしゃい」などとなるだろう。

VII 池にそった道を歩きながら（セリフなし）

清はひとりで、急ぎ足で池に沿った道を歩いている。この池は、もと興福寺の放生池である猿沢の池。現在、奈良公園の中にある。新緑が池に映え、柳の葉が風にゆれる。

VIII 大仏を前にして（セリフなし）

恵美子と母は東大寺の大仏を見物する。東大寺は南都七大寺のひとつで、聖武天皇の発願により創建され、大仏は東大寺の本尊盧遮那仏（るしゃなぶつ）座像で、14.9メートルある。752年開眼供養が行われた。奈良観光のひとつのハイライトで、奈良見物をする人の多くは、この奈良の大仏を訪れる。大仏は、ほかに鎌倉の大仏が有名である。第9巻「かまくらを あるきます」参照のこと。

IX 木村先生のお宅で（⑥1～⑥4）

この場面は、この映画を使つての指導で、重要な言語場面・言語表現が意図されている。日本人の生活・文化の一例でもある。木村先生の家は現在の日本人の住宅の一般的なもの——あるいは少し上——と考えていいだろう。

清は約束どおり、木村先生の自宅を訪ね、夫人に迎えられ、応接間で木村先生と会い、先生とともに、夫人に送られて辞去する。以下6つの小場面に分けて解説する。

IX-1 玄関でのあいさつ(1)（⑥1～⑥7）

清は木村先生の家玄関のドアを開けて入り、夫人に迎えらる。

清 「⑥1ごめんください。」

夫人「⑥2はい。」

清 「⑥3小川と申しますが、先生は、おいでになりますか。」

夫人「⑥④ああ、お待ちしておりました。

⑥⑤どうぞおあがりください。」

清 「⑥⑥失礼いたします。」

夫人「⑥⑦さあ、どうぞ。」

⑥①の「ごめんください」は、人を訪問した際に、家人を呼ぶために使う最も一般的なあいさつ語。「こんにちは」「こんばんは」も使われるが、それより丁寧。この「ごめんください」はまた、辞去する際にも、使われる。「ごめん（御免）」は本来ゆるしを乞うことば。他家を訪問する際ばかりでなく、過失や迷惑を詫びるときにも使われる。詫びの場合は「ごめんなさい」がふつうである。

この訪問の場面で、学習者によっては、大きな疑義や驚きを感じることがあるだろう。清は玄関のドアを開ける前に、ノックしてもいないし、ベルを押してもいないし、声をかけてもいない。つまり、いきなり他人の家に入ったことになる。これについては、鍵（やインターフォン）のあまりなかった昔の庶民生活の伝統が生きていて、現在でも、鍵などのない家庭では、いきなりドアを開けてもそんなに失礼にならないと説明していいだろう。田舎ではこうした傾向はまだ強い。

⑥②の「はい」は、「ごめんください」「こんにちは」など来客のあいさつ（呼びかけ）に対して、在宅を示す返事として扱う。来客がかなり親しい人であることが分からない限り、主人側は玄関まで出迎えるのが礼儀とされており、部屋の中にいたまま「おはいり（ください）」のように言うことはまずない。

⑥③「小川と申します」については自己紹介のことばとして⑥④で既出。「小川と申しますが」の「～が」は、後続文のための前置きの役目を果たす。⑥⑤⑥⑥では理由を述べて中止する用法であったが、基本的に同じものである。29巻の⑥⑦「……私の論文ですが、ご覧いただけますか」とは全く同じ用法である。逆接の「が＝しかし」とは異なること、先行文・後続文をつなぐ役目として全文の調子をやわらげる力のあること、電話など日常生活で多用されて

いることなどを説明したい。「おいでになる」は、ここでは「いる」の尊敬語。既出の④⑬の「来る」の意で用いられていた項を参照されたい。「いらっしゃる」とどちらが丁寧かという質問が予想されるが、一概には決められない。年齢にもよるが「お～になる」形式のほうがいくらか敬意が高いと感ずる人は多いようである。

⑭「ああ、お待ちしております」の「ああ」（感動詞）は、「小川」と聞いてすでに知っていたことを表す。程度の差はあるが、既知のことでなければこの「ああ」は使えない。「ああ、これ／それ／あれか」の場合と同じ。「お待ちする」は「お～する」による「待つ」の謙譲語化。⑮「おたずねします」参照。「～ておりました」は「～ていました」より丁寧の度が高い。⑯⑰で述べたが、自分（側）に使うべきものとして指導したい。なお、「お待ちいたしておりました」は丁寧すぎる感じを与えやすい。また、「お待ちしております」という表現にはく来訪を歓迎する意が含まれているので、客の来訪があらかじめ分かっている場合には、慣用句（あいさつ語）のように使われる側面もある。

⑱の「おあがりください」は、履物を脱いで家に上がれ、という意味で、訪問客を歓迎するあいさつ語。日本の家屋構造からできたことば。画面で説明するのがよいが、部屋自体が外部の道路などより一段高いのが日本式家屋で、この部屋全体が——あえていえば——ベッド式生活様式のベッドに相当する。したがって、外部の履物のままで部屋に入ることは許されない。「あがる」は多義的で、この場合のような下（低）から上（高）へ移動する基本的な意味のほかに、「飲食する」（めしあがる）「訪問する」（うかがう）などの意味でも用いられる。「～てください」という形は、これまで数多く提出されたが、この「お＋動詞連用形＋ください」という型は、29巻も含めてここで初出（ただし「ご覧ください」は29巻⑳にある）。依頼やすすめを表す場合の代表的な尊敬語化の型。注意事項は後出㉔の項で述べる。

㉔の「失礼いたします」は、ここでは、「どうぞおあがりください」と言われたことに対して「（おこぼのとおりに）遠慮なく行動する」の意を表す

あいさつ語。「失礼」は文字どおり礼を欠くことを意味し、古くから無遠慮する際のあいさつ語として広く使われている。ここでは㉔の入室、㉕の別れの場合と同じく、人の家を訪問し、玄関に入ったり、部屋にあがったりするときの慣用的あいさつ語として扱いたい。何を無遠慮と考えるかは日本的習慣による。学習者の自国文化によっては「ありがとう」の類に相当する場合もあろう。

㉗「さあ、どうぞ」の「さあ」は人の行動をうながす場合のことば。「さあ」自体は文脈により多義的。㉘参照。ここでは「おいでを待っていたから」という歓迎の気持を強く表していると見ていいだろう。客が遠慮しており、うながしの気持が強ければ「さあ」は何度でも使われる。

清の靴の脱ぎ方（つま先を先に向ける）、夫人がスリッパを出すこと、などにも注意を向けさせたい。

IX-2 応接間に入って（㉘～㉚）

清は夫人に案内されて応接間に入り、ソファーに座って、木村先生の来るのを待つ。ここで見るような洋式の応接間は日本ではそれほど古いものではないし、小さな日本の家ではすべての家に応接間があるわけではない。日本式家屋では畳敷きの客間ないし座敷に相当する。

夫人「㉘どうぞ、おかけください。」

清「㉙はい。」

夫人「㉚いま、呼んでまいります。」

㉘の「おかけください」は、㉙の「おあがりください」と同じく、「お～ください」という尊敬語化形式。「かける」はさまざまな意味・用法を持っているが、ここでは椅子などに腰をおろすの意。「座る」と区別する。この「お～ください」の語形で注意したいことがある。学習者は「～てください」という形を早くから学習している場合が多いので、「お（かけ）てください」というような形を使ってしまうことがある。謙譲語の「お（待ち）して（おりま

した)」「㉔)のような形が近くにあると余計に間違いを犯す傾向があるので初学者には注意を要する。

㉕)の「はい」。こうした場合、無言でいることは日本では失礼になると教えない。

㉖)の「いま、呼んでまいります」は、話の流れ(文脈)から分かるとおり、「夫(=木村先生)を」が省略されている。「呼んで」を「お呼びして」とすれば、夫(身内)を高く待遇することになる。「～てまいる」は「～てくる」の謙譲語用法。本動詞「まいる」は「行く・来る」の2つの意味があり、ほとんどの場合「～ます」の形でしか使われない。

IX-3 木村先生が来て(㉗～㉙)

夫人が出ていき、清がソファで待っていると、木村先生がドアを開けて入ってくる。ノックはない。しばらくして、夫人がお茶を持ってくる。この場面は、訪問時の応接に関するあいさつ語が多い。

木村「㉗やあ、どうも。」

清「㉘おとといは、ありがとうございました。」

木村「㉙どうぞ、おかけください。」

夫人「㉚どうぞ。」

清「㉛おそれいます。」

㉜どうぞ、おかまいなく。」

夫人「㉝何もございませんが、どうぞ、ごゆっくり。」

㉗「やあ、どうも」の「やあ」は、ここでは、くだけた呼びかけのことば。親しい人のあいだでのみ使われるのがふつう。上位者に使ってはいけない。木村先生は上位者であると同時に、林先生の紹介によって清とは既知の間柄になっているので、親しみを表すことばを使ったとみてよい。「どうも」(副詞)は、「どうも(お待たせして)すみません/失礼しました」「どうも(わざわざ来てくださって)ありがとうございます」その他の圧縮表現とみてさ

しつかえないが、本来、文脈（言語的・非言語的）を背景にしたく多言を費しても自分の気持ちをうまく表現できない>という基本的意味を持っているので、出会い・別れ・感謝・詫び・慶弔・その他、使用されうる場面は極めて広い。適当なことばが見つからない、あるいは言えない、あるいは言う必要がない場合の話し手の気持ちを失礼にならない方法で表現する言語的手段（慣用句）としておくのがいいだろう。19巻参照。木村先生が入室に際し、ノックをしないことに疑義をもつ学習者もいるだろう。これも日本人の鍵のない生活習慣から来ているとみていいだろうが、自宅だからしなくてもよいというものではない。

㊹の「おとといは、ありがとうございました」も、かなり日本的なあいさつ表現と言える。感謝の対象となる事柄——初対面、研究上のアドバイスの依頼、自宅への招待——の発生した日を主題とした言い方。当日、その場で感謝のことばを述べたとしても、その後の再会時にくもう一度謝辞を述べるのが日本的習慣である。この二度にわたるあいさつの必要性（日本人は無意識でやっている）を理解しない学習者はかなり多く、日本人に違和感を与えることがしばしばある。とはいえ、日本人でも若い人は言わなくなってきた傾向がある。

㊺「おそれいます」は、夫人がお茶とお菓子をすすめてくれたことに対する恐縮の気持ちを表すあいさつ語。「すみません」とほぼ同義だが、それより謙譲の気持が強い。「おそれいる（恐れ＋入る）」は、「～ます」の形でないといあいさつ語としての謙譲の気持ちは表せないが、意味上は、詫びる場合と感謝する場合の両方に使える。ここでは後者。「恐れ入りました」の形で、相手の手腕を讃美するのに使うこともある。

日本では来訪者があり、その人が丁寧に扱うべき相手であればあるほど、黙って（相手の好みなど聞かずに）茶菓を出すのが習慣であることは知らせてい。夫人はお茶・お菓子を持ってくると、膝をついてテーブルに出し、すすめる。洋風の部屋なのに、と考える学習者もいよう。これは座るのを作法とする和式生活の名残りと言っていいだろう。日本人はこのように丁寧さを感じ

じられる。夫人のように和服を着ていればなおさらである。出迎え・見送りに玄関で座ることも珍らしくないことをつけ加えるのもいいだろう。

⑦「どうぞ、おかまいなく」の「おかまいなく」は慣用句で、訪問の際、茶菓その他を出されたとき、また特に気を使っている様子のあるときなどに、もてなしを遠慮することば。そこからお礼の意味合いが含まれることばとしてもいいだろう。「お+かまい+なく」で、「かまい」は「かまう」の名詞形であり、「待遇する」「もてなす」の意味。客に対しては「(何も) おかまいできませんが」といって、自分側の接待の乏しいのを詫びるのにもよく使われる。なお、上位者が接待しようとしている際に、「おかまいなく」というのは失礼に当たる、下位者はだまって接待を受けるべきだ、という意見もあるが、成人同士の接待ではこだわる必要はないと思われる。

⑧「何もございませんが」の「ございません」は、一般に「ありません」の丁寧語とされる。「何もございませんが」全体で、特別なごちそうは何もない、あるいはあなたのお口に合うものは何もないかもしれない、と解されている。実際には、たとえ十分なもてなしの用意をしていても謙虚さを表す慣用表現として多用されている。「ございます／ません」自体は、動詞としても補助動詞としても、敬語としての用法は極めて流動的であり正用・誤用の論の対象となりやすいが、ここでそれに触れる余裕はない。「～が」は、既出のものと同じく、後続文のための（後続文は表現されないことも多い）導入の役目を果たす。「ごゆっくり」は客にくつろいでほしい旨を伝えるあいさつ語（尊敬語）。「ご」が和語につく数少ない例のひとつ。

ここで、木村先生は清に敬語を使っていないのに、夫人は使ってよいのかという質問が出るとすれば、上・下の概念から抜け出していない証拠である。清は立派な成人であること、初対面であること（ソトの関係）等から、敬語は当然であると指導したい。

IX-4 かわらの写真をめぐって（⑦⑧～⑧①）

夫人が立ち去ると、木村先生はお茶をすすめ、来訪の目的である写真を見

せる。

木村「㉔さっ、どうぞ。」

清「㉕いただきます。」

木村「㉖これなんですよ。」

清「㉗拝見いたします。」

㉔「さっ、どうぞ」の「さっ」は「さあ」(㉒, ㉓で既出)を少し強く言ったもの。相手の行動をうながすことば。

㉕「いただきます」は、ここでは「飲む」「食べる」の謙譲語であり、あいさつ語。「いただく」は頭上にものを載せる動作から起こり、「もらう」の意味となり、さらに「飲食する」を意味するようになったもの。「飲食する」意味の「いただく」は美化語(丁寧語)としたほうがよいという意見もある。「あなたもいただく？」のような使われ方が多くなってきているからである。学習者には自分(側)以外には使わないようにと指導したい。なお、「いただきます」は人にすすめられると否とにかかわらず、食事を始めるにあたっての習慣的あいさつ語として、食後の「いただきました／ごちそうさま(でした)」と対で教えたい。

㉖「これなんですよ」の「～ですよ」は、何らかの文脈を前提とする説明的表現でここでは、清の訪問の目的が写真を見せてもらうことであり、その写真についてのやりとり(㉘～㉗)が前提になっている。〈あのとき私が言った写真とは／あなたが見たいと言った写真とは〉「これです」の意味であると同時に、「(これな)ので、どうぞ見てください／ご覧に入れます」などの主節(主文)を包みこんだ表現でもある。主文の「よ」は意志・判断・感情などを相手に強く訴える性質を持っているので、上位者や改まった場では使わないように注意させたい。この場合は清を下位者としていると同時に親しみを表そうとしているとみてよいだろう。

㉗「拝見いたします」は「見る」の謙譲語を「拝見する」とし、さらに「する」の部分に謙譲語「いたす」にして、聞き手に対する謙譲の気持ち(つま

り敬意)を強く表したものの。ここで「拝見します」と言っても敬意が足りないとはいえない。「いたします」がかなり美化語(丁寧語)化しているからである。なお、飲食の場合の「いただきます」と似て、「見る」行動開始の場合の合図・あいさつ語に近くなっている。黙って見始めるのは好ましくないことを指導したい。

IX-5 平城宮跡へ行くことについて(㉔~㉙)

清がかわらの写真を見ていて、ある写真が出てくると、木村先生は「そこへ」行ってみないかと誘う。清は喜んで同意する。

木村「㉔もしよかったら、今からそこへ行ってみませんか。」

清「㉕よろしいんですか。」

㉖ぜひ、ごいっしょさせてください。」

木村「㉗ええ。」

清「㉘どうも。」

木村「㉙じゃあ、行きましょうか。」

清「㉚はい。」

㉔「もしよかったら」の「もし」はなくてもかまわないが、使用すれば相手の都合を尊重する度合が強くなる。清にとっては予定になかったことであるので、木村先生は自分の誘いを押しつけがましくしないようにする配慮も含まれていることになる。㉗㉘には清の「よろしかったら」(美化語)がある。「そこへ」は、清がかわらの写真を一枚一枚見ているうちに、平城宮跡(後で解説)の写真が出てくる。そこで「そこへ」と言うのであるから「その写真に写っている所へ／現地へ」ということになる。そこがどんな所であるかは知識のある者でなければ分からないが、ことばの問題としては関係がない。「行ってみませんか」は勧誘。「行ってみましょうか」なら、勧誘も含まれるがむしろ相手の判断を求める提案。

㉕「よろしいんですか」(「よろしい」は美化語で既出の㉗㉘㉙と同じ)

という、誘いに対するこうした返答は、念押し、確認というよりも、「はい」や「ありがとうございます」に近い応答詞的用法で、それ自体ですでに同意を表すものとして扱いたい。「そうしたい」という本心を最初から出すことを避けて、つつしみというワン・クッションの役目を果たす表現である。この場合「よろしいですか」は不適切。これは直接許可を求める表現である。「～んですか」には「先生のお誘いに従いたいので、よろしくお願いします」が含意されている。^④「ぜひ」は、話し手が自分の意志の実現を強く希望するという意味を表す副詞。「ごいっしょする」は「お供する」の謙譲語だが、「ごいっしょさせてください」は「ご（漢語）させてください」という類型表現として扱うのには問題があり、「上位者と一緒に行きたい」を意味する慣用句として扱うほうが無難である。なぜなら「いっしょ」は、ふつう、「する」のつかない語だが、「ごいっしょ」と敬語化されると、「する／いたす」や「なさる」がつき謙譲語にも尊敬語にも使われるめずらしい語である。また、一般にサ変漢語は「ご～させる」という使役用法が可能かどうかというむずかしい問題が出てくる。

- [7] a. ? (人) に～をご報告させる
b. × (人) に～をご研究させる
c. × (人) に／を～へご帰国させる

「ご+漢語」という敬語と「させる」という使役の持つ意味とがすんなりとは結びつきにくいのである。「ご」に含まれる意味が複雑だからである。

^⑤には「拝見させていただく」がある。

^⑥の「ええ」は「ええ、いいです」の意味。^⑦には同じ木村先生の「ええ、いいですよ」がある。「ええ」は「はい」よりもフォーマリティー（改まり）の度合が低く、「うん」よりはずっと高い。29巻でも述べたが、「うん」は「デス・マス」レベルでは使えないので、当然ここでも使えない。

^⑧の「どうも」は「どうも、ありがとうございます」の圧縮表現としていいだろう。「どうも」については^⑨参照。

^⑩「じゃあ、行きましょうか」は下降調で発音される。「～ましょうか」

という志向形の疑問文の形をとっているが、質問の意図はなく、「～ましよう」という意志の表明をやわらげ、多少相手の都合をおもんばかるくうながし>の表現であることに注意させる。

IX-6 玄関でのあいさつ (88~94)

木村先生はドアを開けて清を出し、上着をとると、夫人に外出の声をかける。清は夫人に辞去のあいさつをし、夫人もそれに答える。

木村「88ちょっと行ってくるよ。」

夫人「89はい。」

清「90どうも、ごちそうさまでした。」

夫人「91いいえ、何もおかまいいたしませんで……。」

清「92失礼いたします。」

夫人「93ごめんくださいませ。」

89で木村先生の夫人に対することば遣いが初めて紹介される。「ちょっと行ってくるよ」は親しい間柄ではひんばんに使われる外出の合図(あいさつ)のようなもの。木村先生も清の場合と同じく妻に敬語を使っていないことになる。ここで「ちょっと行ってきます」と言っても、夫婦間だからおかしい、ということにはならないことは言いそえたい。「デス・マス」は敬語ではあるが、特に意識する必要のないほど一般化しているからである。特に女性ではそうである。なお、外出時の「行ってきます」、帰宅時の「ただいま」もいっしょに教えたい。長時間の外出では「ちょっと」は使えないことも、もちろんである。この「ちょっと」は、日常会話の中で頻出するが、「少々」との関連、および場面との関連で意外に学習者を困らせる。「ちょっと／少々お待ちください」とは言えても、「少々行ってきます」は統語的に不自然である。「少々行ってまいります」も変だろう。また、上位者に対しては「ちょっと」という呼びかけはもちろん、「それは、ちょっと……」のような断りにも使いにくい。

⑩の夫人の「はい」は、木村先生が夫人に敬語を使わないなら夫人もまた「うん」でいいという理屈になるが、現実はそのようではない。性別と年齢が関係している。29巻では、清→恵美子と恵美子→母の場合だけ「うん」が現れた。母と清のあいだでは「はい」か「ええ」に限られている。木村夫妻のような年配（または社会的地位のある場合）では、客のいる場面でなくとも「うん」は、使いにくいのが日本の実情とっていいだろう。

⑪「どうも、ごちそうさまでした」は、お茶・お菓子を出してくれたことに対するお礼のあいさつ。かりに実際には手をつけなかったとしても（日本では、好ましくはないが、これも許される）、このあいさつ語は使われる。「～でした」という過去形は食事などが終わったとき、辞去するときなどに使われるが、「～です」は手をつける前に使われることも教えない。くだけた間柄では「～です／でした」は略される。「ごちそうさま」の語構成は「ごちそう＋さま」だが、「馳走」は現代語ではまず使われない。「ご愁傷さま」も同類である。「おあいにくさま」も教えていいだろう。「ごちそう」自体は美化語としていいだろう。

⑫「いいえ、何もおかまいいたしませんで」は、清の謝辞に対する謙譲のあいさつ。⑬の「おかまいなく」で述べたように「かまう」は「もてなす」の意味で、実際に茶菓を出しているが、客に対してもてなしが十分でなく恐縮した、という謙遜の表現があいさつ語化したもの。文末の「～で」が大切。これがないと、謙譲表現であっても、ただの叙述になる恐れがある。なお、謝辞に対する直接の返答のことばとしてだけでなく、訪問客を見送る際にもよく使われる。実際にもてなしができなかったときは「何もおかまいできませんで……」のほうをよく使う。こうした「～で……」も機能としては文の中止用法のひとつである。「何もおかまいできませんが……」は、これからもてなそうとするとき（招待の前置きなども含めて）に使う。

⑭「失礼いたします」はその場の辞去のあいさつ。「さようなら」は長時間（期間）の別れのあいさつで混同しないようにしたいが、上位者には「さようなら」は使いにくいことばであり、その場合は「失礼します／いたしま

す」が適当ということになる。⑤参照。

⑨「ごめんくださいませ」は、ここでは見送る側の別れのあいさつとして使われている。⑥のように訪問の合図（あいさつ）としても使われる。「～ませ」「まし」ともいう。「ます」の命令形からは、かなり改まった感じが強いので、若い人のあいだではしだいに使われなくなってきたと言われている。ここでは、木村夫人の清に対する改まりの態度の現れだとみてよいが、同時に、場面Ⅸを通じて夫人のふだんのことば遣いの様子も暗示させる。

X 平城宮跡で（セリフなし）

画面は一転し、広々とした芝生の中へ木村先生と清が急ぎ足で進んでいく。ここが歴史に名高い平城宮（へいじょうきゅう）の発掘跡である。芝生は遺跡保存のために張られたものである。

平城は奈良の旧称であり、平城宮のあった都市が平城京である。所在地は現在の奈良市街地に接した西側に当たる。

平城京は、古代日本における首都として本格的な都市計画のもとに建設された。710年竣工と同時に遷都が行われ、794年までの84年にわたって首都として栄えた。南北約4 km、東西約3.5 kmの長四角の中国風都城（唐代の長安城に模したと言われる）で、都の南正面中央に羅城門（らじょうもん）があり、そこから北に向かって約3.8 kmの朱雀大路（すざくおおじ）〔幅約50mで他の道の約2倍〕が延び、その北端正面に平城宮がおかれた。都の中は大路と小路で碁盤の目のように区切られ（現在の京都を思い出せばよい）、役人などの住居地があり、しだいに官営の寺院（東大寺・興福寺・その他）や市（東市・西市）も設けられた。大小の建物が建ち並び、人口の推定約20万人で、活気にみちていたといわれる。

平城宮は、全体の面積がほぼ120 haで、宮の周囲には外濠（そとぼり）と高さ約5 mの築地塀（ついじべい）をめぐらし、正門である朱雀門（すざくもん）をはじめ、主要な道路に面して12の門を開いていた。宮内には天皇の即位、正月の朝賀（ちょうが）、外国の使節との会見などをおこなう朝堂院

(ちょうどういん) や、天皇の居所であり政務もおこなう内裏(だいり)があり、このほか東宮(とうぐう)などのような宮室殿舎のある地域も含まれていた。宮城内の約半分の面積は、二官八省などの建物が並ぶ官庁街である。官庁街の大部分の建物は、掘立柱の簡素な規格的な建物であった。平城宮の北方には「松林苑・松林宮」と呼ばれる広大な苑地も設けられていたという。

平城宮の発掘調査は、1954～5年にごく一部が行われ、1959年からは本格的に開始された。1963年には全域の史跡指定と国費による買収が決定して、同年より年間を通して組織的な発掘調査が進められている。現在までの発掘終了面積は約28haで、全体の約3割弱である。発掘調査の終了した部分については、地下遺構にもとづいて順次整備されている。発掘した遺物などの資料は資料館に展示され、遺跡博物館としての整備が進められている。(この解説は奈良国立文化財研究所の案内冊子によった。)

3. この映画の学習項目の整理

29巻の3.で触れたことを前提として述べる。そこでは主に「敬語形式」を扱い、「待遇表現と敬語」、「敬語の形式」、「ダの体、デス・マスの体とその文法性」、「敬意と敬語」などの問題をめぐって簡単に解説した。ここでは、主に「敬語行動」を扱うことにする。さらに、29巻、30巻を通しての「～が」による後続文への導入、また文の中止用法の問題についても簡単な説明を加える。すでに述べたようにこれらは狭義の敬語の問題ではないが、敬意表現と深い関係があるものである。

3.1. 日本人の敬語行動

人間の行動は、コミュニケーションの面から、言語行動と非言語行動に分けられる。この2つが密接に関係していることも事実であり、たとえば、改まったもの言いをする場面で、ぞんざいな態度をとることのできないことをみても分かる。ここでは、非言語行動に触れている余裕はないので、映画

の中で指示・解説が必要と思われる場面が出てきたときは、そこで扱っていただきたい。学習者からみた違和感は意外に多いはずである。

3.1.1. 人間関係の「分類」

ここでは、言語行動を待遇表現の観点から取り上げるが、その待遇行動の基盤となる人間関係のとらえ方については、従来からいろいろな用語を使って試みられている。代表的なものは、上・下、親・疎、ウチ・ソト、恩恵・被恩恵、強・弱、遠・近(距離)などであろう。それぞれの用語の概念は厳密にはかなり複雑である。現代敬語の研究者が広く用いる<上・下>という術語は広義のもので、人間関係と敬語の用法との対応からみて、<上：下＝疎：親＝ソト：ウチ＝恩恵：被恩恵＝強：弱＝遠：近>という考え方に基づいて、記述の都合上、二項対立的に<上・下>で代表させているわけである。単に、目上・目下という意味ではなく、社会的関係も心理関係も含ませている。

日本語教育の現場でも、教育の効果を考えて、<上・下>がよく用いられてきたようにみえる。残念ながら、学習者の多くが初級段階のせいか、狭義の<上・下>からあまり抜け出していないようにみえる。それが不都合なことはすぐ気づかされるので、<親・疎>が加味された。これも学習者には、表面的(直訳的)な意味は分かって、上・下との関連や、母語文化における親疎意識の干渉で、誤解を招くことが多かったように見える。そうかといって、これらに代わる適当な用語や概念があるわけではない。ことば遣いが変わる人間関係のひとつひとつに、社会的・心理的両面から適切な用語を与えることは、相対敬語といわれる現代日本語では、はなはだ困難である。

しかし、普通語・敬語、さらに尊敬語・謙譲語……のように語を「分類」してみせることが学習上の効果にそうものであるとすれば、それらが使い分けられる人間関係の「分類」もまた必然的に要求されているといえるだろう。ことばでも人間関係でも、実用的効果を考えた分類では、大ざっぱすぎても細かすぎてもいけない。言語形式は<有限>であるが、人間関係は<無限>である。このふたつのものを対応させて指導するには、<無限>のもの

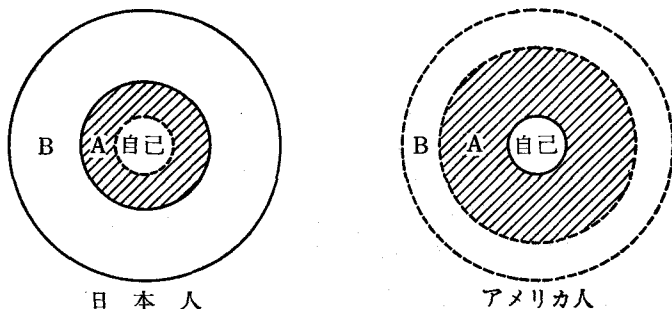
を何とか簡略化しなければならない。そこで、社会学的ないし文化論的用語をかりて日本人の行動形式から人間関係を大ざっぱに把握しようとするのが<上・下><ウチ・ソト>の概念である。<上・下>はしばらくおく。待遇表現や敬語の指導で、相対的に有効なのは<ウチ・ソト>の概念である。日本人の行動様式の原理を<ウチ・ソト>の関係と見、ウチ・ソトの各々に<上・下>がからみあっているとするほうが、指導もしやすく、誤解も少ないと考えられる。学習者から、こんな質問がある。

「先生は、どうして学生に敬語を使うんですか。」

教師は無意識のうちに、多い少ないの差はあれ、学生にもいわゆる敬語を使っていることがあるはずである。教師が女性であったり、学生が成人であったりすれば、なおのことであろう。間違っているとか、好ましい態度ではないとか、だれも言えないだろう。学習者が<上・下>にとらわれて、修正される機会のない責任の大半は教師や教材にあると思われる。この映画でも、母→清、客→店員、木村夫人→清、などのことば遣いに疑問を持つ学習者は少なくないにちがいない。

3.1.2. ウチ・ソトの人間関係

日本人の行動様式の把握に<ウチ・ソト>の概念が有効であると述べたが、どのような説明をすれば、待遇表現、とくに敬語の使われる場面——特に人間関係——を理解するのに役立つであろうか。井出祥子氏（1976）が、日本人とアメリカの「人格構造」を図示して、行動様式の違いを述べられた



論考があるので、その図を利用させていただく。説明の便のために、原図にない記号A・Bを付加したことをお断りしておく。

外側の円および自己をかこむ円の大きさは同じと考える。実線か点線かに注意する。実線は境界がはっきり区別されていることを示し、点線は境界が不確かなことを示す。出たり入ったりがしやすいか否かと考えてよい。A（斜線）の部分が＜ウチ＞であり、Bの部分が＜ソト＞である。Bは日本人のほうがはるかに広い。

日本人の場合を中心に述べる。まず、ウチ・ソトの区別がはっきりしている。A、つまりウチとしてつき合える人間関係とはどんな場合なのか。井出氏は次の3つをあげる。

- ① くつろいだ時の家族間
- ② 仲のよい友人間のつき合い
- ③ 酒の席での男のつき合い

③は臨時の場であるので、固定的には考えにくいだが、この3種はおおむね妥当であろう。このAの世界では、インフォーマルな表現、強くすすめる表現、親愛な表現が好まれ、ホンネがいえる世界、グチをこぼすことが許される世界、甘えられる世界である。自己はしばしばこのウチ全体の中に埋没し、自他の区別がつけにくくなる。この映画（29巻も含めて）では、清と恵美子、恵美子と母のような夫婦間、親子間がこれに当たる。外国人である学習者は、いつ、どのようにしてこのAの世界でのつき合いが可能になるのであろうか。学習者がこれまでに身につけた表現形式からみれば、厳密には新しい世界の導入ということになる。

一方、Bはどんな世界か。A以外の友人・同業者・知人などで、社会的にも心理的にも、何らかの利害関係があり、義理のつき合いやタテマエを大切にし、和や秩序の保持に意識的に努力し、自我をおさえる世界である。言いかえれば、論理よりも相手の心を傷つけないことに気を使う世界である。この世界では、フォーマルな表現、婉曲な表現、つつしみ深い表現が好まれる。＜敬語＞はこの世界で精巧に発達しているわけである。日本人の成人（社会

人)は、家庭を一步出れば、一日の大半をこの世界で過ごすことになる。この映画では、清をとりまく家族以外の関係者は、みなこの世界に入れて考えることができる。

以上のようなAの世界とBの世界のことは違いの対立は相当に顕著である。A(ウチ)の世界のことは違いでB(ソト)の人びとと接すれば、横柄で、無作法で、無教養と判断される。反対に、Bの世界のことは違いをAの世界に持ちこめば、水くさい、他人行儀と非難されやすい。この境界は、日本人にとっては成長するにつれて、つまり社会との関係が密になるにつれて自ずと感得されるものだが、外国人にとってはこの境界の理解には長い努力が要求される。上図のアメリカ人の場合は外国人の一例にすぎないが、この型に属する、あるいは近い行動様式を持った学習者は、その者が積極的な性格であればあるほど、日本人の習慣的意識とのあいだにギャップを生じやすいことになる。無作法で無教養と判断されるよりも、水くさい、他人行儀と判断されるほうが、はるかに安全なのである。ある程度の丁寧表現を主体として教える教育の基本はこんなところにある。ただし、一般の日本人が、外国人なるがゆえに、つまり、日本語はよくできなくて当たり前だという先入観のゆえに、外国人がどのようなことは違いをしても寛大な態度をとる傾向は大いにある。この寛大な態度は、かえって外国人をBの世界に位置づけていることを証明している。日本語のうまいヘンナガイジンとは、Bにいるはずの者が、Aの世界に入り込まれたような気がする意識の表れである。

一方、アメリカ人のAの世界は広い。知っている人、見知らない人をあまり区別することなく、自己に引きよせて、親しくつき合う傾向がある。そこでは、はっきり話すことをよしとし、相手がだれでも、心理的距離を縮めて話すことをよしとする。これは自分の言うことをよく理解してくれるようにとの心遣いから生まれる。しかし「自己」のプライバシーは守る。外国へ行った日本人が、交際べたあるいは無礼だと思われるとすれば、身についた日本式ソトのパターンで行動するからであろう。

では、外国人は、いつ、日本式Aの世界でのことは違いが許されるのか。

くことばがへただから、しかたがない」という寛大な精神やものめずらしさを別にすれば、日本人がソトからウチに入る場合と同じと考えていいだろう。つまり、長いつき合いが必要である。相手がどんな性格の人であるかを見極める必要がある。もちろん、相互の人となりによって長い短いはあるが、一般的に、同じつき合いのくり返しがあったり、人を介しての紹介で互いの背景をよく知っていたり、偶然の出来事で心理的に結びつけられたりする経験がなければならない。学生どうしは類似の基盤をいくつも持ち合わせているので、ウチ扱いが早くしやすくなるだけである。社会人のようにはつき合いの相手が多様でないという対人関係の均質性のためである。

上の図をこの映画の登場人物にも利用する場合に問題になるのは、清(母)からみた母(清)の位置づけである。「義理」という関係を重視すれば<ソト>扱いとなるが、他の登場人物との対比で、<親族>という関係を重視すれば<ウチ>扱いである。客観的にも、ウチ・ソトのちょうど境界に位置づけられるような人物で、2人のあいだでどのようなことば遣いがなされるかは、つき合い(親密さ)の程度によるので、他人からは予想がつかない。待遇表現のありようを示す格好のモデルであり、日本における敬語使用の強さを示している。

なお、ウチ・ソトは<親・疎>の概念とほぼ一致するとみてさしつかえないが、上図と同じように、日本人と外国人(特に欧米人)とではズレが大きく、学習者の<親>概念に基づく行動が、日本人の<ソト>概念に大きく食いこんで違和感をおぼえることがよくある。これは社会経験の少ない若い人に多いように見える。

上図についてつけ加えれば、Bの外側にも世界はある。見知らない人、しかも利害関係のない人の世界である。この世界の人に対することば遣いは、エチケットを守る意識はあるが、個人差が大きい。待遇行動は無視・無言が基本である。初めての人に話しかけるのはたいへん苦手である。またこの図は、Aの位置に、団体や地域や国家を置いて、応用することもできる。直接の上司のことを言うのにソトに対しては敬語を使わないのは、このウチ扱い

の一例である。

3.1.3. 上・下の人間関係

日本人の敬語行動を規定するもうひとつの要因は、対人関係を<上・下>で区別する見方である。従来、これがもっとも大きな要因と考えられていたし、いまでもそう考える人が多いと思われる。事実、この基準で敬語行動を説明すると分かりやすい場合も多い。<ウチ・ソト>と<上・下>のどちらの基準が強くはたらいっているか、現在の敬語使用の実態からはそう簡単に断言できないが、<ウチ・ソト>のほうが強いとみたい。少なくとも、ことば遣いの説明では、このほうが矛盾が少ない。けれども、<ウチ>の世界であっても、<ソト>の世界があっても、それぞれの内部にあっては伝統的な<上・下>の要素がはたらいっていることも無視できない。この映画で、<上・下>が比較的是っきり示されているのは、林先生と清のあいだ、木村先生と清のあいだ、および林先生／清と院生とのあいだである。敬語使用が清→林先生／木村先生という方向で一方的であり、その逆では「です／ます」しか使われていない。

では、<上・下>の概念は何に基づいているのか。日本の伝統的な道徳観や社会構造から来ているわけであるが、上と下を分ける主要な基準は次のようなものであろう。

- ① 生得的属性——年齢（世代）・血縁関係……
- ② 社会的属性——地位・階層・職業・能力……
- ③ 立場関係——師弟・主従・労使・臨時的役割……
- ④ 心理的關係——強弱・恩恵と被恩恵……

この映画で清からみた林先生や木村先生は①②③のすべての関係で<上>と位置づけられるし、母（義理の母）は①で<上>に当てはまる。一方、店員や通行人を<下>に当てはめるのは、とうてい無理である。学習者の母語文化によっては、<客>と<店員>の関係も<上><下>に相当する扱いをしてかまわないところもあるようだが、現在の日本では許されないである

う。

一方、家族間という一般的なウチの関係でも①や④からことば遣いに上下の差のあることも否定しがたいが、これは階層や地域や家庭によるといったほうがいいだろう。しかし、少なくとも眼前に＜ウチ扱い以外の者＞がいれば、夫婦間・親子間であっても敬語が出てくる可能性は強い。これには、上下と性別がかかわっているが、学習者をとまどわせることがある。

3.1.4. ウチ・ソトと上・下のからみ合い

上記3.1.2., 3.1.3.から言えることは、待遇表現を全体としてみれば、＜ウチ・ソト＞と＜上・下＞とは相乗り入りのものであるということである。しかし、個々の話し手と聞き手とが作り出す言語場面は、＜ウチ・ソト＞か＜上・下＞か、いずれかの要素が他より強くはたらいっているとみてよい場合が多い。清と林先生とでは＜上・下＞のほうが強い要因となっているであろうし、林先生と木村先生とは、互いに＜ソト＞ともとらえることができるが、年齢・職業上の先輩・後輩などから、＜上・下＞のほうが妥当であろう。清と木村先生もこれに準ずる。清と木村夫人とでは、＜上・下＞も含まれているが、＜ウチ・ソト＞とみるのが適当であろう。そうでなければ、夫人の清にする丁寧なことば遣いは学習者を納得させないにちがいない。清と母との丁寧なもの言いは、すでに述べたように、義理の間柄という互いの＜ソト＞意識のほうが強いからだとみていいであろう。

＜ウチ・ソト＞と＜上・下＞に関して、学習者からよく出される疑問がある。聞き手と話題の人の関係についてである。例えば、

- (イ) 親しい後輩に電話をかけたが、電話口に出た人が母親か父親であるとき、後輩のことをどう表現するか
- (ロ) 親しい先輩に電話をかけて、電話口に出たのが、その弟か妹であるとき、先輩のことをどう表現するか
- (ハ) 親しい後輩に電話をかけて、電話口に出たのが、弟か妹であるとき、後輩のことをどう表現するか

これらは、ほぼ、＜上・下＞にとらわれたところからくる疑問である。

いずれも、現実には、いくつかの条件が前提となって、表現は一様とはいえない。たとえば、電話の主（話し手）と相手（聞き手）とが、これまでのようなつき合いがあったか、など。いまそれを考慮に入れず、初めての相手として原則的（相手にいやな思いをさせないこと）な結論を言えば、次のようになる。

(イ)は、父親や母親に合わせた言い方が無難である。後輩を＜ソト＞扱いすると同時に、相手の家族内では＜上＞に焦点を合わせる。

(ロ)も、弟・妹は＜ソト＞扱いであると同時に、相手の家族内では＜上＞、つまり先輩に焦点を立てて、そのもの言いを弟・妹にも適用する。弟・妹が成人であれば当然である。

(ハ)は、(イ)や(ロ)の場合に比べれば、改まり（フォーマリティー）の度合が多少低くなる場合もあるが、相手が成人であれば、これまた＜ソト＞扱いである。相手が子どもであれば、親愛の表現が多くなるとは言えるだろう。

次のような表現の例は、学習者はよく a. か b. の一方を間違いだとしてしまいがちである。

〔8〕 ＜平社員→課長＞「では課長、社長によろしく { a. おっしゃって
b. 申し上げて }

ください。」

平社員・課長・社長という3者の関係をどうとらえるかという解釈からくるわけであるが、現実には両方が使われているだろう。ただし、b. は丁寧すぎると感ずる人が多くなっているようである。学習者はまず第一にこのb. を間違いだとしやす。これは謙譲語の「……を低めて……」のような定義だけにとらわれている場合である。社長に対して課長を自分側、つまり＜ウチ＞ととらえれば、社長への配慮をはっきり表していることになる。しかも「(～て) ください」によって、課長への配慮も示していることになる。しかし、現在は a. が好まれる。これは社長への配慮よりも、眼前の課長（聞き手）への配慮のほうが優先しているわけである。

また、次の例はどうであろうか。誤用であろうか。

〔9〕＜学生→教師＞「先生、これを（先生の）坊っちゃんにさしあげてください。」

「さしあげて」（「あげて」も同じ）が一般の解釈に従う謙譲語であれば、動作主である「先生」の扱いは、おかしいということになる。「先生」を自分側（話し手側）、つまり＜ウチ＞として扱い、「坊っちゃん」を＜ソト＞として扱えば、＜上・下＞にとらわれなくてもよいであろう。「さしあげる」を意識的に避けようとするれば、＜プレゼント＞の意味は表しにくくなる。

これらも、先に述べた＜有限＞の言語形式を＜無限＞の人間関係に当てはめるときに出てくる「伝統的分類」の無理である。表現は狭義の文法を超えて存在する。明らかな誤用の説明がつかない限り、自然な表現を一部の「解釈」によってゆがめてはならないだろう。（謙譲語の定義を参照のこと。）

人間関係とことばの使い方には、次の要素も重要であるが、割愛せざるを得ない。

- ＜場面＞——公的な場、私的な場、など
- ＜性別＞——女性のほうが、一般に、男性よりも丁寧であること、など

3.2. その他の学習項目

3.2.1. 「～が」による後続文への導入

29巻には、次のように「～が」を用いて、前後の文を結んでいる表現が3か所に出てくる。

④⑨清→林先生「この間、お話しした私の論文ですが、ご覧いただけますか。」

④⑨林先生→清「ゼミの学生と奈良へ遊びに行くんですが、良かったら、いっしょに来ませんか。」

⑤⑨通行人→清「ちょっとかがいますが、法輪寺へはどう行ったらいいのでしょうか。」

また、30巻には次のような表現がある。

⑥⑨清→木村夫人「小川と申しますが、先生はいらっしゃいますか。」

㊦木村夫人→清「何もございませんが、どうぞ、ごゆっくり。」

いずれも、ある話題や判断事項を提示し、あとに述べる文の前置きや前提条件とする言い方である。まず学習者には、逆接の「が」でないことを理解させる。この用法は、あとの文に言いたいことに話者の主眼があり、そのあとの文の内容が、聞き手にとって唐突であったり、失礼な感じを与えることがないように配慮するための前置きの役目を果たす。聞き手はそれを聞いて心の準備をすることもできる。学習者にとっては、上例の㊥や㊧の例が分かりやすいだろう。電話をかける場合の言い方として「もしもし、〇〇ですが、△△さんはいらっしゃいますか」を習っている学習者には、それと同じだと説明していい。この後続の文は、文脈（言語的・非言語的）により言わなくても相手が分かったと判断された場合には省略されることもよくある。これは文の中止用法につながる。

この「が」の用法でもうひとつ留意しておきたいことは、これが<つつしみ>や<遠慮>を表す場合に多く用いられることから、文全体の丁寧度が高く、後続文はもちろん「が」の直前も「です／ます」の形にする必要があることである。「何もございませんが、——」「失礼ですが、——」「まことに申しわけございませんが、——」のような導入文と後続文との関係を考えると分かりやすい。この「が」がなくなると、導入の役目は果たしにくくなり、ただの叙述となったり、切口上の感を与える恐れが多分にある。「が」の代りに「けれど／けど」が使われることもあるが、「が」に比べると、話者の緊張の度が低くなる。特に「けど」は丁寧感覚にそぐわない。次の例も同じ用法であるが、判断の根拠を示している。

[10] かれは、このごろ元気がないが、具合でも悪いんだろうか。

[11] 風が冷たくなってきたけど、雨でも降るのかな。

3.2.2. 文の中止用法

「～が」による後続文への導入と関係の深いものに、文を言いさしのままで終える用法がある。

29巻の例：

④⑨清→林先生「東京から家内の母が来ておりまして——。」

⑤⑩清→林先生「それで、どこかへ案内しようと思いますので——。」

30巻の例：

⑩⑪清→林先生「木村先生にご意見をうかがいたいことがあるんですが……。」

⑪⑫清→木村先生「よろしかったら、ご意見をうかがいたいことがあるんですが……。」

⑫⑬木村先生→清「私に分かることでしたら……。」

⑬⑭清→木村先生「先生のご都合のよろしいときに……。」

⑭⑮木村夫人→清「いいえ、何もおかまいいたしませんで……。」

「～が」による導入の文では、後続文が明示されていた。それは、明示しないと文脈上話者の意図が明瞭を欠くきらいがあるからであった。しかし、上例がそうであるように、話者の意図が文脈上聞き手にとっても明瞭に推測・判断できる場合は、しばしば後続文は省略される。略省というより、言わないことが待遇表現の理にかなっていることが多い。日本語の表現では、話者の意図をすべてことばの形にかえて明示するよりも、聞き手の判断に依存する部分を残して、聞き手の返答に余裕を持たせる、あるいは聞き手に後続文の内容を先まわりさせて言わせる、という一種の気づかひの表現が好まれる傾向が強い。結論を明示してしまうことは、明示という直接性が聞き手の判断・言語行動を強く規制してしまい、＜思いやり＞が足りないと見られるからである。遠慮をよしとする日本人の価値観と言ってもよいだろう。表現の丁寧度が増すことは、直接性を避け、間接性を重んずる結果だと言いかえることもできる。この間接性は、尊敬表現・謙譲表現すべての基本だとみなすこともできる。上例のような中止用法が極端に簡略化されると、「アノー」「エー」などといわれる＜言いよどみ＞の形となって表れることもある。ただし、これはことばそのものの明晰性への期待と矛盾するので、期待される表現価値にも合いにくい。

4. 参考文献 (29巻と共通)

- 三矢 重松 1908 『高等日本文法』 明治書院
- 山田 孝雄 1924 『敬語法の研究』 宝文館
- 松下大三郎 1928 『改撰標準日本文法』 紀元社
- 松尾捨治郎 1936 『国語法論改』 文学社
- 時枝 誠記 1941 『国語学原論』 岩波書店
- 三尾 砂 1942 『話言葉の文法』 帝国教育出版部 (1958 『話しことばの文法』)
- 江湖山恒明 1943 『敬語法』 三省堂
- 三宅 武郎 1944 『現代敬語法』 日本語教育振興会
- 石坂 正蔵 1944 『敬語史論考』 大八州出版
- 1969 『敬語——敬語史と現代語をつなぐもの——』 講談社
- 金田一京助 1959 『日本の敬語』 角川書店
- 山崎 久之 1963 『国語待遇表現体系の研究——近世編——』 武蔵野書院
- 辻村 敏樹 1967 『現代の敬語』 共文社
- 1968 『敬語の史的研究』 東京堂
- 渡辺 実 1971 『国語構文論』 塙書房
- 宮地 裕 1971 『文論』 明治書院 (新版, 1979)
- 大石初太郎 1971 『話しことば論』 秀英出版
- 1975 『敬語』 筑摩書房 (1966 『正しい敬語』)
- 1983 『現代敬語研究』 筑摩書房
- 伊吹 一 1971 『敬語学入門』 新典社
- 1975 『暮らしの中の敬語』 笠間書院
- 奥山 益郎 1972 『日本人と敬語』 東京堂
- 1970 『あいさつ語辞典』 東京堂
- 1973 『現代敬語辞典』 東京堂

- 1976 『敬語用法辞典』 東京堂
- 1976 『現代敬語読本——人間関係のエチケット——』 ぎょうせい
- 文化庁 1971 『待遇表現』（日本語教育指導参考書2） 文化庁
- 1974 『敬語』（ことばシリーズ1） 文化庁
- 野元 菊雄 1972 『美しい敬語』 芸術生活社
- 国立国語研究所 1957 『敬語と敬語意識』 秀英出版
- 1971 『待遇表現の実態』 秀英出版
- 1981 『大都市の言語生活——分析編——』 三省堂
- 1982 『企業の中の敬語』 三省堂
- 1983 『敬語と敬語意識——岡崎における20年前との比較——』 三省堂
- 南 不二男 1974 『現代日本語の構造』 大修館
- 南 不二男・林 四郎編 1973～74 『敬語講座』全10巻 明治書院
- ①敬語の体系, ②上代・中古の敬語, ③中世の敬語, ④近世の敬語, ⑤明治・大正時代の敬語, ⑥現代の敬語, ⑦行動の中の敬語, ⑧世界の敬語, ⑨敬語用法辞典, ⑩敬語研究の方法
- 大石初太郎・林 四郎編 1975 『敬語の使い方』 明治書院
- 朝日小辞典 1976 『現代日本語』（柴田 武編） 朝日新聞社
- 講座国語史5 1971 『敬語史』（辻村敏樹編） 大修館
- 岩波講座日本語4 1977 『敬語』 岩波書店
- 論集日本語研究9 1978 『敬語』（北原保雄編） 有精堂
- 講座日本語学9 1981 『敬語史』 明治書院
- 角川小辞典 1982 『図説日本語』（林 大監修） 角川書店
- 三上 章 1955 『現代語法新説』 くろしお出版
- 1972 『現代語法序説』 くろしお出版
- 1970 『文法小論集』 くろしお出版
- 1975 『三上章論文集』 くろしお出版

- 紫谷 方良 1978 『日本語の分析』 大修館
- 久野 暉 1983 『新日本文法研究』 大修館
- 牧野 成一 1978 『ことばと空間』 東海大学出版会
- 柴田 武監修 1980 『都市の敬語の社会言語学的研究——昭和53年度札幌における敬語調査報告——』（第1部・第2部）文部省特定研究「言語」総括班
- 鈴木 孝夫 1973 『ことばと文化』 岩波新書
- 井出 祥子 1979 「英語敬語の理解と翻訳」（英語文学世界11巻12号）英潮社
- 1979 『男のことば女のことば』 日経通信社
- 水谷 修 1979 『日本語の生態』 創拓社
- 直塚 玲子 1980 『欧米人が沈黙するとき』 大修館
- 国広哲彌編 1982 『日英語比較講座第5巻——文化と社会——』 大修館
- J. V. ネウストプニー 1982 『外国人とのコミュニケーション』 岩波新書
- 大石初太郎・他 1978 『ことばの昭和史』 朝日選書
- 1983 『新しい敬語』（日本語シンポジウムIV）小学館
- 荒木 博之 1973 『日本人の行動様式』 講談社現代新書
- 1983 『敬語日本人論』 PHP研究所
- 講座日本語の表現3 1983 『話しことばの表現』（水谷 修編）筑摩書房
- 築島 謙三 1970 「話しことばにおける日本人の論理」（『日本人の性格』所収）朝倉書店
- 日本語教育学会編 1982 『日本語教育辞典』 大修館
- 国語学会編 1980 『国語学大辞典』 東京堂

<敬語等の特集（雑誌）>

- 日本語教育（日本語教育学会）：No.35（1978）「敬語と敬語指導をめぐる問題」
- 言語生活（筑摩書房）：1957.7「現代の敬語」、1961.4「正しい敬語」、

- 1965.3「敬語を使い分ける」, 1969.6「日本語の敬語はむずかしいか」,
1979.4「職場の敬語」, 1982.4「壁としての敬語」
- 国文学（学燈社）：1960.1増「敬語法の総合探求」, 1972.3増「敬語ハンドブック」, 1976.9増「あなたも敬語が正しく使える」, 1981.1増「敬語の手帖」
 - 言語（大修館）：1979.6「敬語とは何か」
 - 日本語学（明治書院）：1983.1「敬語」, 1983.7「言語行動」
 - 解釈と鑑賞（至文堂）：1967.10「敬語のとらえ方」, 1972.5増「現代の敬語とマナー」
 - 文法（明治書院）：1968.12「研究成果を文法指導に採り入れるポイント・敬語」
 - 国語学（国語学会）：1974.5「近代敬語」

Neustupný, J. V. 1978 *Post-Structural Approaches to Language*, 東大出版会

Makino, Seiichi 1983 “Speaker/Listener-Orientation and Formality Marking in Japanese” 言語研究 No. 84

Harada, Shinichi 1976 “Honorifics” in *Syntax and Semantics 5, Japanese Generative Grammar*, ed. by Shibatani, New York, Academic Press

Prideaux, Gary D. 1970 *The Syntax of Japanese Honorifics*, Mouton
Martin, Samuel E. 1964 “Speech levels in Japan and Korea” in
Language in Culture and Society, Harper & Row

O’Neil, P. G. 1966 *Respect Language in Modern Japanese*, University of London

Brown, R. W. and Gilman, A. 1968 “The pronouns of power and solidarity” in *Readings in the Sociology of Language*, ed. by Fishman, Mouton

資料

資料1. 使用語彙一覧

これは、この映画中に言語表現として現れた全ての語について一覧表にしたものである。資料2.のシナリオ全文同様、教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな、かたかな）書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
 - 2.—1. 接頭語「お」「ご」や、接尾語「じ（時）」等は、見出し語として取り上げている。
 - 2.—2. 数詞は、助数詞と切り離して見出し語に立てている。
 - 2.—3. 動詞は、終止形を見出し語にしている。サ変複合運動詞は、「する」を切り離して二語扱いにしている。
 - 2.—4. 形容動詞は、「___な」の形を見出し語にしている。
 - 2.—5. 「だ」「です」に前接する「ん」「なん」は、一語扱いにして見出し語にしている。
 - 2.—6. 「おそれいます」等、慣用的表現として扱ったものは、見出し語にしている。
 - 2.—7. 助動詞「た」や接続助詞「て」は、ここでは動詞部分に含め見出し語にしていない。ただし、助詞「たら」は、動詞部分から切り離し、見出し語に立てている。
3. 見出し語の語義、活用変化、他の語との結びつき等に基づいて下位分類する場合には、(1)(2)……のようにした。
 - 3.—1. 「お」「ご」は、意味・用法により下位分類した。
 - 3.—2. 動詞のうち、「うかがう」等は、意味・用法等により下位分類し、また動詞は、本動詞としての用法と補助動詞としての用法で大きく二分した。本動詞の場合は「ます」形であるか、「——て」等の形であるかで下位分類し、補助動詞が違えばさらに下位分類してある。

また常体での言い方は、一語扱いにして別の分類にした。

- 3.—3. 「どうも」等は、その意味・用法により下位分類してある。
- 3.—4. 「だ」「です」は、それに伴う終助詞の種類、また「だ」「です」に「ん」「なん」が前接するかどうかにより下位分類してある。
- 3.—5. 助詞「か」「が」「に」「ね」「の」等は、その意味・用法によって下位分類してある。
4. 「ます」「ません」「ました」「ましょう」については文例の列挙を省略し、文番号だけを示した。
5. 使用文例の文頭には、①②……の数字がつけてある。これはシナリオでの文通し番号であり、この解説書体に共通のものである。同一見出し語内では、この順に文例を提出した。(1)(2)……と下位分類した場合にも、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文については通し番号を横に並べ、引用を一回ですませた。
6. 見出し語の横には〔 〕で常用漢字の範囲内で漢字を示し、またその横には（ ）で語の使用回数を示した。

ああ(4)

- ② ああ、おがわくん、おはよう。
- ⑮ ああ、おがわくん。
- ⑤① ああ、そうでしたね。
- ⑥④ ああ、おまちしておりました。

あがる〔上がる〕(1)

- ⑥⑤ どうぞおあがりください。

あさって(1)

- ④⑩ では、あさってのさんじごろはどうですか。

あっ(2)

- ③ あっ、そうだ。
- ②③ あっ、かわらのしゃしんなら、わたしのうちにありますよ。

ありがとう(3)

- ⑨、③⑧ ありがとうございます。
- ⑦② おとといは、ありがとうございました。

ある(3)

- (1)②③ あっ、かわらのしゃしんなら、わたしのうちにありますよ。
- (2)⑩ きむらせんせいにごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。
- ③⑩ よろしかったら、ごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。

いい(2)

- ⑧ いいきかいだから、しょうかいしましょう。
- ③⑥ ええ、いいですよ。

いいえ(1)

- ③② いいえ、なにもおかまいいたしませんで……。

いう〔言う〕(1)

- ④④ ははは、とうしょうだいじがみたいといっていたわ。

いく〔行く〕(3)

- (1)⑧⑦ じゃあ、いきましようか。

(2)②② もしよかったですら、いまからそこへいってみませんか。

⑥⑨ ちょっとってくるよ。

いけん〔意見〕(2)

⑩ きむらせんせいにごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。

③⑩ よろしかったですら、ごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。

いたす〔致す〕(8)

(1)②①, ⑥⑥, ⑨⑨ しつれいいたします。

⑧① はいけんいたします。

(2)②⑤ よろしくおねがいいたします。

④② では、さんじにおうかがいいたします。

⑨② いいえ、なにもおかまいいたしませんで……。

(3)②② きむらせんせい、ごしょうかいいたします。

いただく〔頂く〕(1)

⑦⑨ いただきます。

いただける〔頂ける〕(2)

(1)⑦⑦ もしよろしかったですら、ごしょうかいいただけませんか。

(2)③⑤ はいけんさせていただけませんかでしょうか。

いつ(1)

①⑧ こんどは、いつおいでになりますか。

いっしょ〔一緒〕(1)

⑥④ ぜひ、ごいっしょさせてください。

いま〔今〕(4)

(1)②⑧ おがわくんはいま、ならじだいのたてものについてけんきゅうしております。

②② いま、ならじだいのかわらについて、しらべております。

⑦⑦ いま、よんでまいります。

(2)②② もしよかったですら、いまからそこへいってみませんか。

いる(3)

(1)⑩ きむらせんせいがおいでになっています。

(2)⑤② きむらせんせいは、なんのごけんきゅうをなさっているの。

(3)④④ ははは、とうしょうだいじがみたいといっていたわ。

うかがう〔伺う〕(4)

(1)⑬ はい、うかがいます。

(2)⑩ きむらせんせいにごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。

⑩ よろしかったら、ごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。

(3)④② では、さんじにおうかがいたします。

うち(2)

③ あっ、かわらのしゃしんなら、わたしのうちにありますよ。

⑦ うちへきてくれますか。

うん(1)

⑤ うん。

ええ(5)

⑥, ④⑦, ⑥⑩, ⑤ ええ。

⑥ ええ、いいですよ。

お(11)

(1)⑤ どうぞおあがりください。

⑥③, ⑦③ どうぞ、おかけください。

(2)⑤⑩ そろそろ、きむらせんせいをおたずねします。

⑥④ ああ、おまちしておりました。

(3)⑤⑤ よろしくおねがいたします。

④② では、さんじにおうかがいたします。

⑨② いいえ、なにもおかまいいたしませんで……。

(4)⑦⑥ どうぞおかまいなく。

(5)⑤⑨ では、おきをつけて。

(6)⑤③ せんせいはね、こういうふるいかわらにおくわしいかたなんだよ。

おいで(4)

(1)⑩ きむらせんせいが**おいで**になっています。

⑬ おがわともうしますが、せんせいは**おいで**になりますか。

(2)④ きょうのごご、きむらせんせいが**おいで**になりますよ。

⑮ こんどは、いつ**おいで**になりますか。

おかあさん〔お母さん〕(1)

⑬ **おかあさん**、つぎはどこをごらんになりますか。

おがわ〔小川〕(7)

② ああ、**おがわ**くん、おはよう。

⑭ はい、**おがわ**です。

⑮ ああ、**おがわ**くん。

⑲ こちらが、こうしのおがわきよしんです。

⑳ **おがわ**ともうします。

㉑ **おがわ**くんはいま、ならじだいのたてものについてけんきゅうして
ります。

㉒ **おがわ**ともうしますが、せんせいは**おいで**になりますか。

おそれいます〔恐れいます〕(1)

㉗ **おそれ**います。

おととい(1)

㉚ **おととい**は、ありがとうございました。

おはよう〔お早う〕(2)

① はやしせんせい、**おはよう**ございます。

② ああ、**おがわ**くん、**おはよう**。

おる(3)

㉑ **おがわ**くんはいま、ならじだいのたてものについてけんきゅうして**お**
ります。

㉒ いま、ならじだいのかわらについて、しらべて**おり**ます。

㉓ ああ、おまちして**おり**ました。

か(12)

- (1)⑮ こんにちは、いつおいでになりますか。
 ③⑦ うちへきてくれますか。
 ④⑩ では、あさってのさんじごろはどうですか。
 ④⑨ おかあさん、つぎはどこをごらんになりますか。
 ⑥⑨ おがわともうしますが、せんせいはおいでになりますか。
 ⑥⑨ よろしいんですか。
 (2)⑦ もしよろしかったら、ごしょうかいいただけませんか。
 ③⑤ はいけんさせていただきませんか。
 ⑥⑨ もしよかったら、いまからそこへいってみませんか。
 ⑥⑦ じゃあ、いきましようか。
 (3)②⑨、④④ そうですか。

が⑩

- (1)④ きょうのごと、きむらせんせい**が**おいでになりますよ。
 ①⑥ きむらせんせい**が**、おいでになっています。
 ②③ こちら**が**、こうしのおがわきよくんです。
 (2)④④ ははは、とうしょうだいじ**が**みたいといっていたわ。
 (3)⑩ きむらせんせいにごいけんをうかがいたいこと**が**あるんですが……。
 ③⑩ よろしかったら、ごいけんをうかがいたいこと**が**あるんですが……。
 (4)⑩ きむらせんせいごいけんをうかがいたいこと**が**あるんですが……。
 ③⑩ よろしかったら、ごいけんをうかがいたいこと**が**あるんですが……。
 ⑥⑨ おがわともうしますが、せんせいはおいでになりますか。
 ⑦⑦ なにもございせん**が**、どうぞごゆっくり。

かえる〔帰る〕(1)

- ⑤⑦ もうすこしけんぶつして、ゆうがたには**かえる**わ。

かける〔掛ける〕(2)

- ⑥⑧、⑦③ どうぞ、**おかけ**ください。

かた〔方〕(1)

- ⑥⑨ せんせいはね、こういうふるいかわらにおくわしい**かた**なんだよ。

かまう〔構う〕(2)

- ㊦ どうぞおかまいなく。
㊧ いいえ、なにもおかまいいたしませんで……。

から(1)

- ㊨ もしよかったら、いまからそこへいってみませんか。

から(1)

- ㊩ いいきかいだから、しょうかいしましょう。

かわら(3)

- ㊪ いま、ならじだいのかわらについて、しらべております。
㊫ あっ、かわらのしゃしんなら、わたしのうちにありますよ。
㊬ せんせいは、ね、こういうふるいかわらにおくわしいかたなんだよ。

きをつける〔気をつける〕(1)

- ㊭ では、おきをつけて。

きかい〔機会〕(1)

- ㊮ いいきかいだから、しょかいしましょう。

きむら〔木村〕(8)

- ㊯ きょうの、ごご、きむらせんせいがおいでになりますよ。
㊰ ならのきむらせんせいですね。
㊱ きむらせんせいにごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。
㊲ きむらせんせいがおいでになっています。
㊳ きむらせんせい、ごしょうかいいたします。
㊴ きむらです。
㊵ そろそろ、きむらせんせいをおたずねします。
㊶ きむらせんせいは、なんのごけんきゅうをなさっているの。

きよし〔清〕(1)

- ㊷ こちらが、こうしのおがわきよしくんです。

きょう〔今日〕(1)

- ㊸ きょうのごご、きむらせんせいがおいでになりますよ。

きれいな〔奇麗な〕(1)

④⑤ ここのやねはきれいね。

ください〔下さい〕(5)

(1)⑫ それでは、にじごろ、わたしのけんきゅうしつにきてください。

②④ ぜひ、ごいっしょさせてください。

(2)⑥⑤ どうぞおあがりください。

⑥⑤, ⑦③ どうぞ、おかけください。

くる〔来る〕(3)

(1)⑧⑨ ちょっといってくるよ。

(2)⑫ それでは、にじごろ、わたしのけんきゅうしつにきてください。

②⑦ うちへきてくれますか。

くれる(1)

②⑦ うちへきてくれますか。

くわしい〔詳しい〕(1)

③③ せんせいはね、こういうふるいかわらにおくわしいかたなんだよ。

くん〔君〕(4)

② ああ、おがわくん、おはよう。

①⑤ ああ、おがわくん。

②③ こちらが、こうしのおがわきよしくんです。

②③ おがわくんはいま、ならじだいのたてものについてけんきゅうしております。

けっこうな〔結構な〕(1)

④① はい、けっこうです。

けんきゅう〔研究〕(2)

②③ おがわくんはいま、ならじだいのたてものについてけんきゅうしております。

③③ きむらせんせいは、なんのごけんきゅうをなさっているの。

けんきゅうしつ〔研究室〕(1)

⑫ それでは、にじごろ、わたしのけんきゅうしつにきてください。

けんぶつ〔見物〕(1)

⑤⑦ もうすこしけんぶつして、ゆうがたにはかえるわ。

ご〔御〕(8)

(1)⑩ きむらせんせいにがいけんをうかがいたいことがあるんですが……。

③⑩ よろしかったら、がいけんをうかがいたいことがあるんですが……。

③⑨ せんせいのごつごうのよろしいときに……。

⑤⑨ きむらせんせいは、なんのごけんきゅうをなさっているの。

(2)②② きむらせんせい、ごしょうかいいたします。

(3)⑦ もしよろしかったら、ごしょうかいいただけますか。

(4)④④ ぜひ、ごいっしょさせてください。

(5)⑦⑦ なんにもごさいませんが、どうぞごゆっくり。

こういう(1)

⑤③ せんせいはね、こういうふるいかわらにおくわしいかたなんだよ。

こうし〔講師〕(1)

②③ こちらが、こうしのおがわきよしくんです。

ここ(2)

④⑧ ここのやねはきれいね。

⑤⑤ では、ここですつれいします。

ごご〔午後〕(1)

④ きょうのごご、きむらせんせいがおいでになりますよ。

ございました(1)

⑦② おとといは、ありがとうございました。

ございます(3)

① はやしせんせい、おはようございます。

⑨、③⑨ ありがとうございます。

ございません(1)

⑦⑦ なんにもございませんが、どうぞごゆっくり。

ごちそうさま(1)

- ㊦ どうもごちそうさまでした。

こちら(1)

- ㊧ こちらが、こうしのおがわきよくんです。

こと(3)

- ㊨ きむらせんせいにごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。
㊩ よろしかったら、ごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。
㊪ わたしにわかることでしたら。

ごめんください(2)

- ㊫ ごめんください。
㊬ ごめんくださいませ。

ごらん〔御覧〕(1)

- ㊭ おかあさん、つぎはどこをごらんになりますか。

これ(1)

- ㊮ これなんですよ。

ごろ(2)

- ㊯ それでは、にじごろ、わたしのけんきゅうしつにきてください。
㊰ では、あさってのさんじごろはどうですか。

こんど〔今度〕(1)

- ㊱ こんどは、いつおいでになりますか。

さあ(2)

- ㊲ さあ、そこへ。
㊳ さあ、どうぞ。

さっ(1)

- ㊴ さっ、どうぞ。

さん〔三〕(2)

- ㊵ では、あさってのさんじごろはどうですか。
㊶ では、さんじにおうかがいたします。

じ「時」(3)

⑫ それでは、にじごろ、わたしのけんきゅうしつにきてください。

④⑩ では、あさってのさんじごろごろはどうですか。

④⑫ では、さんじにおうかがいたします。

じだい「時代」(2)

②⑧ おがわくんはいま、ならじだいのたてものについてけんきゅうしております。

③⑩ いま、ならじだいのかわりについて、しらべております。

しつれい「失礼」(4)

②①, ⑥⑥, ⑨③ しつれいいたします。

⑤⑤ では、ここでしつれいします。

じゃあ(2)

④⑥ じゃあ、そうしましょう。

⑧⑦ じゃあ、いきしょうか。

しゃしん「写真」(1)

③③ あっ、かわらのしゃしんなら、わたしのうちにありますよ。

しょうかい「紹介」(3)

⑦ もしよろしかったら、ごしょうかいいただけませんか。

⑧ いいきかいだから、しょうかいしましょう。

②② きむらせんせい、ごしょうかいいたします。

しらべる「調べる」(1)

③② いま、ならじだいのかわりについて、しらべております。

すぐ(1)

①⑦ はい、すぐまいります。

すこし「少し」(1)

⑤⑦ もうすこしけんぶつして、ゆうがたにはかえるわ。

する(9)

(1)⑥⑩ そろそろ、きむらせんせいをおたずねします。

- ⑤⑤ では、ここでしつれいします。
- (2)⑧ いいきかいだから、しょうかいしましょう。
- ④⑥ じゃあ、そうしましょう。
- (3)②⑧ おがわくんはいま、ならじだいのたてものについてけんきゅうしております。
- ④④ ああ、おまちしておりました。
- (4)⑤⑦ もうすこしけんぶつして、ゆうがたにはかえるわ。
- (5)⑤⑤ はいけんさせていただけませんかでしょうか。
- ④④ ぜひ、ごいっしょさせてください。

ぜひ〔是非〕(1)

- ④④ ぜひ、ごいっしょさせてください。

せる(2)

- ④⑤ はいけんさせていただけませんかでしょうか。
- ④④ ぜひ、ごいっしょさせてください。

せんせい〔先生〕(11)

- ① はやしせんせい、おはようございます。
- ④ きょうのごご、きむらせんせいがおいでになりますよ。
- ⑤ ならのきむらせんせいですね。
- ⑩ きむらせんせいにごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。
- ①⑥ きむらせんせいがおいでになっています。
- ②② きむらせんせい、ごしょうかいいたします。
- ③⑨ せんせいのごつごうのよろしいときに……。
- ⑤⑩ そろそろ、きむらせんせいをおたずねします。
- ⑤⑨ きむらせんせいは、なんのごけんきゅうをなさっているの。
- ⑤⑨ せんせいはね、こういうふるいかわらにおくわしいかたなんだよ。
- ⑥③ おがわともうしますが、せんせいはおいでになりますか。

そう(8)

- ①① そうですね。

⑩ そうですね、らいげつのなかごろに……。

②③、②④ そうですか。

④⑥ じゃあ、そうしましょう。

④⑨ そうね。

⑤① ああ、そうでしたね。

⑤④ そう。

そうだ(1)

③ あっ、そうだ。

そこ(2)

②⑦ さあ、そこへ。

②⑧ もしよかったら、いまからそこへいってみませんか。

それでは(1)

⑫ それでは、にじごろ、わたしのけんきゅうしつにきてください。

そろそろ(1)

⑤⑩ そろそろ、きむらせんせいをおたずねします。

だ(2)

⑧ いいきかいだから、しょうかいしましょう。

⑤③ せんせいはね、こういうふるいかわらにおくわしいかたなんだよ。

たい(3)

⑩ きむらせんせいにごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。

③⑩ よろしかったら、ごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。

④④ ははは、とうしょうだいじがみたいといっていたわ。

たずねる〔訪ねる〕(1)

⑤⑩ そろそろ、きむらせんせいをおたずねします。

たてもの〔建物〕(1)

②⑧ おがわくんはいま、ならじだいのたてものについてけんきゅうしております。

たら(4)

(1)⑦ もしよろしかったら、ごしょうかいいただけませんか。

⑩ よろしかったら、ごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。

⑫ もしよかったですら、いまからそこへいってみませんか。

(2)⑪ わたしにわかることでしたら……。

ちょっと(1)

⑬ ちょっといってくるよ。

つぎ〔次〕(1)

⑭ おかあさん、つぎはどこをごらんになりますか。

つごう〔都合〕(1)

⑮ せんせいのごつごうのよろしいときに……。

で(2)

(1)⑯ では、ここでしつれいします。

(2)⑰ いいえ、なにもおかまいいたしませんで……。

でした(2)

⑱ ああ、そうでしたね。

⑲ どうもごちそうさまでした。

でしょう(1)

⑳ はいけんさせていただきませんでしょうか。

です(16)

(1)⑲ はい、おがわです。

㉑ こちらが、こうしのおがわきよしくんです。

㉒ きむらです。

㉓ はい、けっこうです。

(2)㉔ ㉕ そうですね。

㉖ では、あさつてのさんじごろはどうですか。

(3)㉗ ならのきむらせんせいですね。

㉘ そうですね。

㉙ そうですね、らいげつのなかごろに……。

(4)⑧1 わたしにわかることでしたら……。

(5)⑧2 ええ、いいですよ。

(6)⑩ きむらせんせいにごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。

③0 よろしかったら、ごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。

③8 よろしいんですか。

(7)⑧0 これなんですよ。

では(4)

④0 では、あさってのさんじごろはどうですか。

④2 では、さんじにおうかがいたします。

⑤5 では、ここでしつれいします。

⑤9 では、おきをつけて。

と(3)

(1)④4 ははは、とうしょうだいじがみたいといっていたわ。

(2)②4 おがわともうします。

③3 おがわともうしますが、せんせいはおいでになりますか。

どう(1)

④0 では、あさってのさんじごろはどうですか。

とうしょうだいじ〔唐招提寺〕(1)

④4 ははは、とうしょうだいじがみたいといっていたわ。

どうぞ(10)

②0, ⑤6, ⑦4 どうぞ。

③5 どうぞおありがとうございます。

③7 さあ、どうぞ。

③8, ⑦3 どうぞ、おかけください。

⑦6 どうぞおかまいなく。

⑦7 なにもごさいませんが、どうぞごゆっくり。

⑦8 さっ、どうぞ。

どうも(3)

(1)⑦① やあ、どうも。

(2)⑧② どうも。

⑨① どうもごちそうさまでした。

とき(1)

⑨② せんせいのごつごうのよろしいときに……。

どこ(1)

④③ おかあさん、つぎはどこをごらんになりますか。

ない(1)

⑦⑥ どうぞおかまいなく。

なかごろ〔中ごろ〕(1)

①⑨ そうですね、らいげつのなかごろに……。

なさる(1)

⑤② きむらせんせいは、なんのごけんきゅうをなさっているの。

なにも〔何も〕(2)

⑦⑦ なにもごさいませんが、どうぞごゆっくり。

⑨② いいえ、なにもおかまいいたしませんで……。

なら〔奈良〕(3)

⑤⑤ ならのきむらせんせいですね。

②⑧ おがわくんはいま、ならじだいのたてものについてけんきゅうしております。

③⑨ いま、ならじだいのかわらについて、しらべております。

なら(1)

③③ あっ、かわらのしゃしんならわたしのうちにありますよ。

なる(5)

(1)④ きょうのごと、きむらせんせいがおいでになりますよ。

①⑧ こんどは、いつおいでになりますか。

⑥③ おがわともうしますが、せんせいはおいでになりますか。

(2)④⑨ おかあさん、つぎはどこをごらんになりますか。

(3)⑩ きむらせんせいがおいでになっています。

なん〔何〕(1)

⑫ きむらせんせいは、**なん**のごけんきゅうをなさっているの。

なん(2)

(1)⑩ これ**なん**ですよ。

(2)⑤ せんせいはね、こういうふるいかわらにおくわしいかた**なん**だよ。

に〔二〕(1)

⑫ それでは、**に**じごろ、わたしのけんきゅうしつにきてください。

に(14)

(1)⑫ それでは、**に**じごろ、わたしのけんきゅうしつにきてください。

⑬ あっ、かわらのしゃしんなら、わたしのうちにありますよ。

(2)⑩ そうですね、らいげつのなかくろに……。

⑭ せんせいのごつごうのよろしいときに……。

⑮ では、さんじにおうかがいたします。

⑯ もうすこしけんぶつして、ゆうがたにはかえるわ。

(3)⑩ きむらせんせいに**ご**いけんをうかがいたいことがあるんですが……。

(4)⑤ せんせいはね、こういうふるいかわらにおくわしいかた**なん**だよ。

(5)⑩ わたしに**わ**かることでしたら……。

(6)④ きょうのごご、きむらせんせい**が**おいでになりますよ。

⑰ きむらせんせい**が**おいでになっています。

⑱ こんどは、いつ**が**おいでになりますか。

⑲ おかあさん、つぎはど**こ**を**ご**らんになりますか。

⑳ おがわともうしますが、せんせい**は**おいでになりますか。

について(2)

㉑ おがわくんはいま、ならじだいのたてもの**について**けんきょうしております。

㉒ いま、ならじだいのかわら**について**、しらべております。

ね(8)

(1)⑤ ならのきむらせんせいですね。

④⑧ ここのやねはきれいね。

④⑨ そうね。

⑤① ああ、そうでしたね。

(2)①① そうですね。

①⑨ そうですね、らいげつのなかくろに……。

(3)⑤③ せんせいはね、こういうふるいかわらにおくわしいかたなんだよ。

(4)④⑤ ね。

ねがう〔願う〕(1)

②⑤ よろしくおねがいたします。

の(13)

(1)④ きょうのごご、きむらせんせいがおいでになりますよ。

⑤ ならのきむらせんせいですね。

①② それでは、にじごろ、わたしのかんきゅうしつにきてください。

①⑨ そうですね、らいげつのなかくろに……。

②③ こちらが、こうしのおがわきよしくんです。

②⑧ おがわくんはいま、ならじだいのたてものについてかんきゅうしております。

②⑨ いま、ならじだいのかわらについて、しらべております。

②③ あっ、かわらのしゃしんなら、わたしのうちにありますよ。

②③ あっ、かわらのしゃしんなら、わたしの方にありますよ。

②⑧ せんせいのごつごうのよろいときに……。

②⑨ せんせいのごつごうのよろしときに……。

④⑩ では、あさってのさんじごろはどうですか。

④⑧ ここのやねはきれいね。

⑤② きむらせんせいは、なんのごけんきゅうをなさっているの。

(2)⑤② きむらせんせいは、なんのごけんきゅうをなさっているの。

は(11)

- ⑩ こんどは、いつおいでになりますか。
- ⑳ おがわくんはいま、ならじだいのたてものについてけんきゅうしております。
- ㉑ では、あさってのさんじごろはどうですか。
- ㉒ おかあさん、つぎはどこをごらんになりますか。
- ㉓ ははは、とうしょうだいじがみたいといっていたわ。
- ㉔ このやねはきれいね。
- ㉕ きむらせんせいはなんのごけんきゅうをなさっているの。
- ㉖ せんせいはね、こういうふるいかわらにおくわしいかたなんだよ。
- ㉗ もうすこしけんぶつして、ゆうがたにはかえるわ。
- ㉘ おがわともうしますが、せんせいはおいでになりますか。
- ㉙ おとといはありがとうございました。

はい(8)

- ⑬ はい、うかがいます。
- ⑭ はい、おがわです。
- ⑰ はい、すぐまいります。
- ⑳ はい、けっこうです。
- ㉒, ㉓, ㉔, ㉕ はい。

はいけん〔拝見〕(2)

- ㉖ はいけんさせていただきませんか。
- ㉗ はいけんいたします。

はは〔母〕(1)

- ㉓ ははは、とうしょうだいじがみたいといっていたわ。

はやし〔林〕(1)

- ① はやしせんせい、おはようございます。

ふるい〔古い〕(1)

- ㉖ せんせいはね、こういうふるいかわらにおくわしいかたなんだよ。

へ(3)

㊦ さあ、そこへ。

㊧ うちへきてくれますか。

㊨ もしよかったら、いまからそこへいってみませんか。

まいる〔参る〕(2)

(1)㊩ はい、すぐまいります。

(2)㊪ いま、よんでまいります。

ました(1)

㊫

ましょう(3)

㊬, ㊭, ㊮

ます(23)

㊯, ㊰, ㊱, ㊲, ㊳, ㊴, ㊵, ㊶, ㊷, ㊸, ㊹, ㊺, ㊻, ㊼, ㊽, ㊾, ㊿

㊿, ㊿, ㊿, ㊿, ㊿

ませ(1)

㊿ ごめんくださいませ。

ません(4)

㊿, ㊿, ㊿, ㊿

まつ〔待つ〕(1)

㊿ ああ、おまちしておりました。

みる〔見る〕(2)

(1)㊿ ははは、とうしょうだいじがみたいといっていたわ。

(2)㊿ もしよかったら、いまからそこへいってみませんか。

もう(1)

㊿ もうすこしけんぶつして、ゆうがたにはかえるわ。

もうす〔申す〕(2)

㊿ おがわともうします。

㊿ おがわともうしますが、せんせいはおいでになりますか。

もし(2)

⑦ もしよろしかったら、ごしょうかいいただけませんか。

②② もしよかったですら、いまからそこへいってみませんか。

やあ(1)

⑦① やあ、どうも。

やね〔屋根〕(1)

④⑧ ここのやねは、きれいね。

ゆうがた〔夕方〕(1)

⑤⑦ もうすこしけんぶつして、ゆうがたにはかえるわ。

ゆっくり(1)

⑦⑦ なにもごさいませんが、どうぞゆっくり。

よ(6)

④ きょうのごご、きむらせんせいがおいでになりますよ。

③③ あっ、かわらのしゃしんなら、わたしのうちにありますよ。

③⑥ ええ、いいですよ。

⑤③ せんせいはね、こういうふるいかわらにおくわしいかたなんだよ。

③⑧ これなんですよ。

③⑨ ちょっといってくるよ。

よい〔良い〕(1)

③② もしよかったですら、いまからそこへいってみませんか。

よぶ〔呼ぶ〕(1)

⑦⑦ いま、よんでまいります。

よろしい(4)

(1)③⑨ せんせいのごつごうのよろしいときに……。

(2)③⑧ よろしいんですか。

(3)⑦ もしよろしかったら、ごしょうかいいただけませんか。

③⑩ よろしかったですら、ごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。

よろしく(1)

②⑤ よろしくおねがいをいたします。

らいげつ〔来月〕(1)

- ①⑨ そうですね、らいげつのなかごろに……。

わ(2)

- ④④ ははは、とうしょうだいじがみたいといっていたわ。

- ⑤⑦ もうすこしけんぶつして、ゆうがたには、かえるわ。

わかる〔分かる〕(1)

- ⑧① わたしに**わかる**ことでしたら……。

わたし(3)

- ⑫ それでは、にじごろ、**わたし**のけんきゅうしつにきてください。

- ③① **わたし**に**わかる**ことでしたら……。

- ③③ あっ、かわらのしゃしんなら、**わたし**のうちにありますよ。

を(5)

- ⑩ きむらせんせいに**ごいけんを**うかがいたいことがあるんですが……。

- ③⑩ よろしかったら、**ごいけんを**うかがいたいことがあるんですが……。

- ④③ おかあさん、つぎは**どこを**ごらんになりますか。

- ⑤⑥ そろそろ、きむらせんせい**を**おたずねします。

- ⑤② きむらせんせいは、なんの**ごけんきゅうを**なさっているの。

ん(3)

- ⑩ きむらせんせいに**ごいけんを**うかがいたいことがある**ん**ですが……。

- ③⑩ よろしかったら、**ごいけんを**うかがいたいことがある**ん**ですが……。

- ③③ よろしい**ん**ですか。

資料2. シナリオ全文

題 名 日本教育映画

「せんせいを おたずねします」

——待遇表現 2——

企 画 国立国語研究所

制 作 日本シネセル株式会社

フィルム 16m/m E Kカラー・スタンダード

巻 数 全1巻

上映時間 5分

現 像 所 東映化学

録 音 読売スタジオ

完 成 昭和58年8月15日

制作スタッフ

制 作 静 永 純 一 制作担当 佐 藤 吉 彦

脚 本 前 田 直 明 演 出 前 田 直 明

演出助手 野 澤 和 之 撮 影 相 良 国 康

撮影助手 篠 沼 哲 夫 照 明 伴 野 功

照明助手 西 田 博 中 安 和 則

スクリプト 成 田 由起子

録 音 小 川 正 城 (読売スタジオ)

ネガ編集 斉 藤 康 一

配 役 小川 清 御 友 公 喜 小川恵美子 正 木 香 子

恵美子の母 五十嵐 美恵子 林 教 授 西 本 裕 行

木村 教授 木 村 宗 男 木村 夫人 北 城 真記子

カット	画 面	セ リ フ
1	メイン・タイトル 「日本語教育映画」 テーマ・タイトル 「せんせいを おたずねします」 ——待遇表現 2——	
2	京都の大学前	
3	歩く林、後から清	<p>きよし「①はやしせんせい、おはようございます。」</p> <p>はやし「②ああ、おがわくん、おはよう。」</p> <p>③あつ、そうだ。</p> <p>④きょうのごご、きむらせんせいがおいでになりますよ。」</p> <p>きよし「⑤ならのきむらせんせいですね。」</p> <p>はやし「⑥ええ。」</p> <p>きよし「⑦もしよろしかったら、ごしょうかいいただけませんか。」</p> <p>はやし「⑧いいきかいだから、しょうかいしましょう。」</p> <p>きよし「⑨ありがとうございます。」</p> <p>⑩きむらせんせいにごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。」</p> <p>はやし「⑪そうですね。」</p> <p>⑫それでは、にじごろ、わたしのけんきゅうしつにきてください。」</p> <p>きよし「⑬はい、うかがいます。」</p>

4	清の研究室	
5	仕事をしている清と同僚 電話が鳴って、清受話器を とる	<p>きよし「⑭はい、おがわで す。」</p> <p>はやし「⑮ああ、おがわく ん。</p> <p>⑯きむらせんせいがおいで になっています。」</p> <p>きよし「⑰はい、すぐまいり ます。」</p>
6	林の研究室	
7	林と木村	<p>はやし「⑱こんどは、いつお いでになりますか。」</p> <p>きむら「⑲そうですね、らい げつのなかごろに。」</p> <p>はやし「⑳どうぞ。」</p> <p>きよし「㉑しつれいいいたしま す。」</p> <p>はやし「㉒きむらせんせい、 ごしょうかいいたします。</p> <p>㉓こちらが、こうしのおが わきよしくんです。」</p> <p>きよし「㉔おがわともうしま す。</p> <p>㉕よろしくおねがいたしま す。」</p> <p>きむら「㉖きむらです。」</p> <p>はやし「㉗さあ、そこへ。</p> <p>㉘おがわくんは、いま、な らじだいのたてものについ てけんきゅうしておりま す。」</p>
8	ドアを開けて入る清	
9	林・木村・清	
10	木村・清	
11	林・木村・清 清座る	
12	木村・清	<p>きむら「㉙そうですか。」</p> <p>きよし「㉚よろしかったら、</p>

		<p>ごいけんをうかがいたいことがあるんですが……。」</p> <p>きむら「㉔わたしにわかることでしたら……。」</p> <p>きよし「㉕いま、ならじだいのかわりについて、しらべております。」</p> <p>きむら「㉖あっ、かわらのしやしんなら、わたしのうちにありますよ。」</p> <p>きよし「㉗そうですか。」</p> <p>㉘はいけんさせていただけませんでしょうか。」</p> <p>きむら「㉙ええ、いいですよ。」</p> <p>㉚うちへきてくれますか。」</p> <p>きよし「㉛ありがとうございます。」</p> <p>㉜せんせいのごつごうのよろしいときに……。」</p> <p>きむら「㉝では、あさってのさんじごろは、どうですか。」</p> <p>きよし「㉞はい、けっこうです。」</p> <p>㉟では、さんじにおうかがいたします。」</p> <p>きよし「㊱おかあさん、つぎは、どこをごらんになりますか。」</p> <p>えみこ「㊲ははは、とうしょうだいじがみたいといっていたわ。」</p> <p>㊳ね。」</p>
13	木村肩越し、清	
14	清肩越し、木村	
15	清、顔	
16	木村、顔	
17	木村・清	
18	大和の田園	
19	歩く清・恵美子・母	
20	歩く三人 移動	

21 唐招提寺
22 屋根をみている母・恵美子・清

23 かわら屋根沿いに歩く三人

24 別れ道の三人

25 猿沢池
26 歩く清
27 東大寺・大仏殿内
28 大仏を見る恵美子と母
29 木村先生の家
30 玄関へ入る清

きよし「④⑥じゃ、そうしまし
よう。」

はは「④⑦ええ。」

はは「④⑧ここのやねは、きれ
いね。」

えみこ「④⑨そうね。」

きよし「⑤①そろそろ、きむら
せんせいをおたずねしま
す。」

はは「⑤②ああ、そうでした
ね。」

えみこ「⑤③きむらせんせい
は、なんのごけんきゅうを
なさっているの。」

きよし「⑤④せんせいはね、こ
ういうふるいかわらにおく
わしいかたなんだよ。」

えみこ・はは「⑤⑤そう。」

きよし「⑤⑥では、ここでしつ
れいします。」

はは「⑤⑦どうぞ。」

えみこ「⑤⑧もうすこしけんぶ
つして、ゆうがたにはかえ
るわ。」

きよし「⑤⑨うん。」

⑤⑩では、おきをつけて。」

はは「⑤⑪ええ。」

きよし「⑥①ごめんください。」

31 清肩越し、木村夫人

清、玄関をあがる

32 応接室に入る夫人と清
清、ソファーに座る

33 応接室に入る木村
二人

34 夫人、お茶をもってくる
35 清、顔

36 夫人・清・木村
夫人、出ていく

37 木村肩越し、清
清、お茶を飲む
木村・清

38 清、写真をみる
写真（かわら）

ふじん「㉔はい。」
きよし「㉕おがわともしま
すが、せんせいは、おいで
になりますか。」

ふじん「㉖ああ、おまちして
おりました。

㉗どうぞおあがりくださ
い。」

きよし「㉘しつれいいたしま
す。」

ふじん「㉙さあ、どうぞ。」

ふじん「㉚どうぞ、おかけく
ださい。」

きよし「㉛はい。」

ふじん「㉜いま、よんでまい
ります。」

きむら「㉝やあ、どうも。」

きよし「㉞おとといは、あり
がとうございました。」

きむら「㉟どうぞ、おかけく
ださい。」

ふじん「㊱どうぞ。」

きよし「㊲おそれいります。

㊳どうぞ、おかまいなく。」

ふじん「㊴なにもございませ
んが、どうぞ、ごゆっく
り。」

きむら「㊵さっ、どうぞ。」

きよし「㊶いただきます。」

きむら「㊷これなんですよ。」

きよし「㊸はいけんいたしま
す。」

39	清	きむら「㉔もしよかったら、
40	写真（平城宮跡）	いまからそこへいってみま
41	木村	せんか。」
42	木村、清	きよし「㉕よろしいんです
	二人、応接室を出る	か。
		㉖ぜひ、ごいっしょさせて
		ください。」
		きむら「㉗ええ。」
		きよし「㉘どうも。」
		きむら「㉙じゃあ、いきまし
		ょうか。」
		きよし「㉚はい。」
43	玄関口の木村・夫人・清	きむら「㉛ちょっといってく
		るよ。」
		ふじん「㉜はい。」
44	夫人肩越し、清	きよし「㉝どうも、ごちそう
		さまでした。」
45	夫人、顔	ふじん「㉞いいえ、なにもお
		かまいいたしませんで…
		…。」
46	清、顔	きよし「㉟しつれいいたしま
		す。」
47	清肩越し、夫人	ふじん「㊱ごめんくださいま
48	平城宮跡	せ。」
49	〃	
50	かわら石	
51	歩く清・木村	
52	企画・制作タイトル	
	企画 国立国語研究所	
	制作 日本シネセル株式会	
	社	